

医家芸術 秋季号 目次

59 巻 通巻 624 号 (2015 年度)

第 63 回医家美術展 2

◇医家随想

白足袋を履いた猫

出来 尚史 11

「早く楽にしてください」

浜名 新 17

チェーホフを読む (8)

イオーヌイチ

藤倉 一郎 24

日本軍による食糧の現地調達

松崎 茂 26

老婆は一日にして成らず

豊泉 清 31

生還！バンザイ突撃に参戦した軍

医中尉 (6)

美濃部 幸恵

協力 美濃部 欣平 34

医芸俳壇 42

医芸柳壇 43

医芸歌壇 44

◇アンコール掲載

『メキシコ・オリンピック

旅行記念』③

日本医家芸術クラブ 編 45

メキシコ・オリンピック旅行記

松本 喜久二

松本 喜子 47

メキシコ・オリンピック旅行の

思い出

三浦 みゆき 56

◇ほ ん 61

「九十五歳記念 飯田収絵画展」

が開催

白矢 勝一 62

クラブ通信 65

透視像 66

編集後記 66

表紙の言葉 10

原稿募集のお知らせ 43

第 63 回 医家美術展

2015 年 9 月 4 日 (金) ～ 6 日 (日)

ギャラリー銀座『悠玄』にて

【6 日 美術展懇談会】

平成二十七年九月四日(金)～六日(日)、ギャラリー銀座『悠玄』にて、第六十三回医家美術展が開催されました。

今年は十九名による三十二作品が展覧され、力作ぞろいのすばらしい美術展となりました。

今年も画家の藤島清平先生にお越しいただき、懇親会では作品の寸評をしていただきました。今年的美術展は初参加の先生も数名おられ、懇親会にも御出席いただき、常連の美術部の先生方と有意義な時間を過ごされました。

遠方からお越しの先生も多数おられ、東京在住のご友人との再会も楽しんでおられたようです。

これからも初参加大歓迎ですので、少しでも美術にご興味のあるかたがいらっしやしましたら、どうぞ事務局まで御遠慮なくご連絡ください。

次ページより今年の展覧作品の紹介と、藤島先生の寸評をひとことだけ掲載させていただきますので、ご覧ください。



第63回 日本医家美術展
2015年9月4日(金)～6日(日)
11:00-19:00 最終日15:00まで
ギャラリー悠玄 東京都中央区銀座6-3-17
Tel: 03-3572-2526

「夜雨風景」 藤島 清

主催：日本医家美術クラブ 事務局：小平市芸術町 1-4-12
Tel: 042-344-8056 Fax: 042-344-0879
後援：日本医師会・日本歯科医師会・日本薬剤師会・東京医師会



◆飯田 収

『浅間山風景』

浅間山と手前の小川のバランスがとてもいいです。小川のまわりの表現も素晴らしいです。色づかいも飯田先生独特で素敵です。



『浅間山風景』
F10 油彩

◆榎本 貴夫

『天地開闢—イグアス・アルゼンチン—』

独特な表現法で素敵な絵です。スケールの大きな景色を一つの画面への捉え方が素晴らしいです。画面うへの緑・赤・黄色も素敵です。



『天地開闢—イグアス・アルゼンチン—』
F12 油彩



『半世紀前のロンドン橋』
F10 油彩

『赤富士』

富士は描きたいと思う題材のひとつですが、とても難しいです。自分の個性をださないと平凡な絵になってしまうので大変だと思いますが何回も挑戦してがんばってみてください。



『赤富士』
F10 油彩

◆海老原 隆郎

『人物』

自由さがあって素敵な作品です。な

んとも言えない雰囲気が出ていてきれいです。細かいことは色々勉強していけばいいと思うので、全体的にきれいなのでとてもいい作品だと思います。



『人物』
F8 水彩

『静物』

水彩はとても難しいですが、きれいに描けています。りんごといえばセザンヌですが、セザンヌの作品をみるとものの捉え方の勉強にもなりますので、ぜひご覧になってまた描いてみてください。



『静物』
F8 油彩

◆荻野 公嗣

『静物』

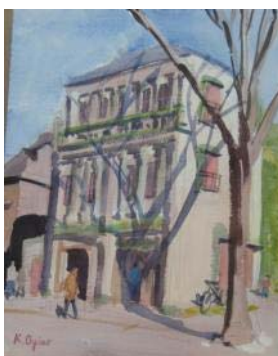
この油絵の感じもいいです。にんじんの感じもすごく素敵です。とても上手です。配置もよく、全体的にまとまった綺麗な絵です。



『静物』
F8 水彩

『建物』

うまい水彩画です。建物に写った木の影もいい味をだしています。水彩は難しいですがとても素敵な絵です。



『静物』
F6 油彩



◆奥田 哲章

『オレークラナダの舞姫』

スペインの踊り子の感じがよく出ています。洞窟の中の円を狭くみせる感じにすると人が映えておもしろい絵になるかもしれません。踊り子の動きがよく出ていて素敵な作品です。



『オレークラナダの舞姫』
F50 油彩

『水面に映えるサンタマリア』

「アルハンブラ宮殿」

水面に映った感じがとても綺麗です。ただ色彩が日本の風景のようです。同じ青や緑でも色々あると思いますので、色々工夫して描いてみるとヨ

ーロッパらしい感じになると思いますが。素敵な絵なのでまた挑戦してみてください。



『水面に映えるサンタマリア』
「アルハンブラ宮殿」
F20 油彩

◆落久保 万里子

『私の裸婦』

鉛筆の繊細な線がでていて綺麗です。水彩の細い筆もつかって綺麗です。配置が素敵です。もうすこし太い線もつかって強弱をつけて描いてみていいかもしれません。



『私の裸婦』
F3 水彩

◆金 進『赤城山』

山の感じも小川の感じもいいですね。空もこの絵にはあっていると思います。色づかいが統一されていてきれいです。



『赤城山』
F20 油彩

◆木村 典子

『花屋』

花屋をこのように描いているというのが素敵ですね。花よりも硝子のようすや天井のようすが素晴らしいですね。花は一つ一つ描かなくてもよかったかもしれません。奥に人がいるのもいいです。



『花屋』
F10 油彩

◆坂下 昇

『ライトアップされた原爆ドーム』

十分素敵な絵ですが、左後のビルが

少し気になります。もう少しぼやかしたりして描くと前のドームが強調されてよかったかもしれません。



『ライトアップされた原爆ドーム』
F20 油彩

『敵島神社の舞楽』

また作風の違う絵ですが、こちらも後の山をもう少し工夫して描くと手前の人物が映えてよかったとおもいます。衣装の感じがとてもよく描かれていて素晴らしいです。

◆白幡 雄一『裸婦』

毎年「裸婦」を描かれている先生です。いつも独特なタッチで白幡先生らしい絵です。背景もよく考えられており、前の裸婦とのバランスも悪くないです。



『裸婦』
F50 油彩



『敵島神社の舞楽』
F20 油彩

◆白矢 勝一

『求愛』

自由であって描きたりないようであって、その独特なところが白矢先生の絵のいいところです。色もいいしおもしろい作品です。



『求愛』
F10 油彩

『語らい』
まだ硬い作品ですが、もう少しやわらかい感じを出すともっといいです。女性のおしゃべりの感じが出ているいい作品です。



『語らい』
F10 油彩

◆鈴木 博

『スクリーンの前で』

素晴らしい作品です。毎年感心していますが、洋装の場合は難しいですが女性らしさがでていて素敵です。欲をいいますと胸の下あた리가ペタンとみえてしまうので工夫すると思います。



『砂嵐の日 (サハラ)』
F40 油彩

◆鈴木 啓之『砂嵐の日 (サハラ)』
とてもよく描けています。風の強い感じもでていて砂嵐の感じがでています。空の色はもう少し砂の感じを混ぜて描いてみたらまた素敵な絵になったかもしれません。



『スクリーンの前で』
F30 油彩

『アーモンドの花の咲く頃』

よく感じが出てます。素晴らしいです。この汚した感じのところも素敵です。とつてもうまい表現で素敵です。昨年までの「寂」の絵もまたいいですが、今年作品も素晴らしいです。



『アーモンドの花の咲く頃』
M30 油彩

◆長沼 弘三郎 『水仙』

緑と青の色がとても素敵です。先生独特の表現方法でとても魅了されます。先生の三作品は個性的でとても素敵です。



『水仙』
F20 油彩

『おもちゃの飛行場』

古い織物のような感じの絵です。油絵だそうですが独特な雰囲気が出ています。色が素晴らしいです。まわりが浮いた感じに見えるのもおもしろいです。



『おもちゃの飛行場』
F20 油彩

『透かし菊』

青がすごく素敵にできています。油絵ですが硝子のような感じもでていて素敵です。オリジナリティがあり誰でもかけるといふ作品でないところが素敵です。



『透かし菊』
F30 油彩

◆新本 稔 『Hawaiiの宿』

この空はこの絵にあってとても上手です。現代的な描き方で味があつていいと思います。

◆野口 眞利

『Café Van GOGH』

いい絵です。右手前の看板がすこし貼り付けたみたいになってしまっているのですが、少し遊び心をいれて描く、いいと思います。左側は素晴らしい表現で、すごく素敵です。



『Café Van GOGH』
F30 油彩



『Hawaii の宿』
F20 油彩

『ストラスブルグの街』

『ストラスブルグの街』
周りの建物や街灯が雰囲気を出してとてもいいですが、手前の白い看板がまともすぎて全体の雰囲気を少し殺してしまっています。少し遊び心をいれてかいてもよかったかもしれません。



『ムーランド ラ ギャレット』
F10 油彩

『ムーランド ラ ギャレット』
モンマルトルの風景が素敵です。タッチも先生独特で素晴らしいです。ヨーロッパらしい空です。木の表現の仕方もうまくて素晴らしいです。色づかいがとてもいいです。影の色もいいです。

◆山崎 嘉弘

『パーティーと海』

『パーティーと海』
今回の作品もとてもいいです。造形的な感じも絵画的になって素晴らしいです。上の黒い二本の線も真ん中のガラスの線もとてもきれいです。画面の構成が素晴らしいです。



『パーティーと海』
S50 アクリル水彩



『ストラスブルグの街』
F8 油彩

◆山下 婦美子

『アンコールワット 神々の回廊』

色がきれいです。瓦のような色ですが、それがとても素敵です。空の色ともあつていて素敵なお感じの絵です。古風な感じもするし新しい感じもするユニークな絵です。



『アンコールワット 神々の回廊』
P20 油彩

◆山田 治『出漁』

船が出て行く音が聞こえてくるようです。素晴らしいです。空をもう少し工夫して描くともっと素晴らしい絵になるかと思います。海はすごく素晴らしく描けています。



『出漁』
F20 油彩

『隠れ家の夜』

線の描き方のくせか左が上がつてしまっているの、下げて描いた方がいいと思います。建物の中のお感じがいいです。



『隠れ家の夜』
F10 油彩

表紙の言葉

横浜市 斎藤 三朗

『宍道湖落陽』

宍道湖の夕日はカメラを手にする者にとってはあこがれの被写体だ。

僕も都合三回も挑戦したが失敗。平成十九年秋にたまたま学会が島根であり、夕方タクシーを飛ばして湖畔に向かった。すでに大勢のカメラマンが場所を確保していたが、何とか嫁ヶ島を取り入れた場所で撮影できた。四年来の宝物となった。

(第四十四回 医家写真展出品)

医家随想



白足袋を履いた猫

出来 尚史

これは一匹の猫とその飼い主夫婦の物語である。

私の家の斜向かいに木立に囲まれた家があり、そこに老夫婦が住んでいた。主人のSさんは白髪、瘦身。長い鬚を生やしているので、里に下りてきた仙人といった風情だ。ご主人が仙人なら奥さんは弁天様。柔和な笑みを絶やさない、ちよつと太めの元弁天様——おっと、これは失言だったか。温厚な人柄ゆえ町内の誰

からも慕われるお二人であつた。

ある日のこと、ここに一匹の猫がやつてきた。一歳になつたばかりの雄猫だ。もとは野良だつたという話だが、たいそう人なつこい。Sさん夫婦の喜びようは一通りではなかつた。娘さんが嫁いだ後、二人きりの生活が長く続いていたからだ。猫は「ドン」と名付けられた（由来は今もって不明である）。Sさんは「ドン」と呼んだ。奥さんは「ドン君」と呼ぶ。猫を見つめる二人の眼差しは吾が子を慈しむかのような温かさに満ちていた。ドン君は天から授かつた息子だつたのだ。短い秋が終わろう

とする頃、二人と一匹、いや三人家族の新しい生活が始まつた。



さて、話を進める前にドン君の姿形について触れておかねばならない。顔立ちは目立つて可愛いというほどではない。尻尾の長いごく普通の雄猫である。色は濃い目のグレイ、縞模様。特筆すべきは足部だ。四本とも真つ白で、その白い部分の範囲が等しい。つまり、白とグレイの境界線が定規で測つたように同じ高さなのだ。足が四本とも白い猫はたくさんいる。しかしここまでピッタリと高さの揃つた猫にはそれまで出会つたことがなかつた。白い短靴を履いた猫？ うーむ。ここは日本だから「白足袋を履いた猫」といふべきか。ドン君が塀の上を歩くと、この白

足袋がよく映える。堂々とした姿は花道を進む千両役者そのものである。惚れ惚れするような男っぷりだ。木が入り、彼が大見得を切った日には思わず声をかけたくなってしまう。

「日本一！」

ヨーロッパの長靴猫は飼い主に幸せをもたらした。日本の白足袋猫は果たして何を運んでくるのだろうか。



Sさんという時、ドン君は大概おんぶされているか、抱っこされていた。まるで貴重品扱い。下にも置かぬ、といったところだ。猫をおんぶ？と訝る向きもある。私も見るまでどうやるのか想像できなかった。人間の子供のように両手を肩にかけさせるのではない。横向きにして肩――

項――肩の上に載せる。右手で前脚、左手で後脚を押えて完成。猫の顔はSさんの右肩から覗く形になる。

「この子は甘えん坊だね」というのが猫を背負ったSさんの口癖であった。

奥さんとお出かけの時、ドン君はいつも自転車のかごの中。

「買物ですか」

「ええ、連れて行けつてきかないんですよ」

ドン君は頭だけかごから出してすまし顔だ。奥さん、買った魚はかごに入れちゃだめですよ。家に辿り着くまでになくなってしまう。

いくら過保護に育てられたからといつてもそこは雄猫、親の目を盗んでフラリと出かけることもある。そう、若いうちは一杯冒険しなくては。遊び疲れて戻って来ると、心配顔のSさんが戸口で待っている。抱き上

げてさつそくお説教だ。

「どこに行ってたんだ、お前は。駄目だよ、遠く行っちゃ」

下がった目尻を見ると本気で怒っていないことがわかるうというもの。Sさん、私の方を向いて

「好奇心が旺盛だねえ、すぐにいなくなっちゃうんですよ」

ま、でも猫だし。いいんじゃないですか。

ドン君のホームグラウンドはSさんの家と私の家との間の狭い道路だ。クルマがほとんど通らないから彼にとつて格好のくつろぎの場となっている。寝そべったり、転がったり、ペタンペタンと尻尾で地面を打っていたかと思うと、突然跳び上がった……。変幻自在のパフォーマンスは見るだけでも楽しい。うちの家族にもよく馴れて、呼ぶと甘えた声を出して寄ってくるようになった。娘

たちは早々とファンクラブを結成した。猫じやらしや毛糸玉を使つて一緒に遊ぶ様は小さい子供に戻つたかようだった。

「一緒にいるとホツとするというか、仕事の疲れが取れるのよね」ドン君ついにOLの「癒し猫大明神」となる。

猫嫌いだった筈の家内までいつの間にかファンクラブの一員だ。

「ねえ、尻尾を立てて私の足に体をこすり付けてくるのよ。あれつて猫の愛情表現ですつてね」

はいはい、そうでしょうとも。

通りすがりの人も足を止めて声をかけてくる。

「あら、かわいい。名前なんというの」

大勢の取り巻きにチャホヤされてドン君、至極ご満悦の体だ。



私も猫を飼つていたことがある。とはいつてもずつと昔の話。実際に面倒を見ていたのは祖母だった。とんでもないガキだった私は猫のヒゲを引っ張ったり、尻尾を掴んでなげたり、着地実験と称して高い所から落したり、今から思えばひどいことをやった。逆襲にあつて噛まれる、引っ搔かれるは日常のことだった。猫が嫌いだったわけではない。むしろ好きだったと思う。ただ、愛玩動物として見ていたのではなかった。身近にいる不思議な存在に惹かれていた、といえればよいのだろうか。抱いている時にも牙の生え具合の観察、肉球の触感の確認など、いわゆる男の子の好奇心を満たすのに忙しかつ

た。

Sさん夫婦とドン君の交りいはこれとは明らかに違う。私と猫との間に存在していた緊張感はなく、いつ見ても和やかな、打ち解けた雰囲気。満ちていた。なんといつても、ドン君は二人にとつて最愛の息子。彼自身も自分を人間だと勘違いしているように思えた。互いに頼り、そして頼られる。そうか、これが猫を飼うということか。ワルガキ時代から六十年を経た私は心から感心するのだった。



ストリートキャットのドン君、車は平気だが、自転車は苦手だ。男の子も大嫌い。野良猫時代に怖い思いをしたのだろうか。男の子が自転車に乗って近づこうものなら脱兎（脱猫）のごとく逃げ去る。跳ね起きて

姿を消すまでゼロコンマ何秒の素早さだ。ビーチフラッグの大会に出れば優勝はまず間違いない。

もともと猫は狩りをする動物だった。敏捷に動かなければ餌は取れない。そういうえばSさんの奥さんが言っていた。

「家の中にスズメやトカゲを運んできて困るんですよ」

トカゲはともかく、スズメを捕まえるのは無理だろう、と思う人がいるかも知れない。いやいやとんでもない。私はこの目で猫がスズメを獲るのを見たことがあるのだ。

あれは以前勤めていた病院でのこと。窓際で昼食を摂りながら何気なく中庭を見ると、茂みの中に猫がうずくまっている。三メートルほど先で二羽のスズメが地面の餌をつついては飛び立ち、また地面に降りるといったことを繰り返していた。猫は

これを狙っていたのだ。相手には羽がある。これは失敗に終わるな、と私は予想していた。「動」のスズメに対する「静」の猫。その「静」が突然動いた。一羽のスズメが降りてきて地面に触れようとする、まさにその瞬間だった。猫とスズメの影が一つに重なる——次に私が見たのはスズメを啜えた猫が急ぎ足で去っていく姿だった。

なるほどどうまいことを考えたものだ。飛んでいる鳥を捕まえるのはいかな猫でも難しかろう。しかし地面に降りようとした鳥が、急遽それを取りやめて跳び上がるには、時間がかかる。運動ベクトルが全く逆方向なのだ。その一瞬を猫は突いた。見事というほかはない。

こうした狩りの能力は生得のものと聞く。親から教わる機会のなかった子猫でもその勘所を押さえている

らしい。ドン君の体にも先祖の血が流れているのだ。たかが飼猫と侮るなかれ。

そういえば側溝に身を潜めるドン君を見かけたことがあった。あれはドブネズミの様子を窺うためだったのか。実際この界限にはネズミの目撃談がある。それを狙って青大将まで出役しているというから大変だ。蛇もドン君の得意の分野。彼の活躍の場がつかえることはない。



Sさん夫妻の愛情を一身に受けながらドン君のぬくぬくと楽しい日々

は続いた。春は花壇でひと暴れ、夏は木陰で銷夏に専念、秋は木に登ってSさんの柿もぎを手伝い、冬は陽だまりでうとうと——またたく間に月日は立って行った。

Sさんも奥さんもなんだか以前より若返ったようだった。二人共よく笑い、よく動いた。毎日の生活はすっかりドン君中心に回っていた。西洋の長靴猫と同様、日本の白足袋猫も飼い主に幸せをもたらしたのだ。生きがいという人生最大の幸せを。



二年目を過ぎたころからドン君は太り始めた。特に腹回りが著しかった。雄猫でなかったら妊娠か？と勘違いするところだ。過食と運動不足が原因だろうか。若いのにすっかりメタボ体型。こうなると曾てのしなやかさは失われ、動作にも切れが見

られなくなる。塀に跳び上がるのも大儀そうだった。Sさんは格別案ずる風でもなかったが、私たち家族の意見は一致していた。「痩せなきゃね。あれじや犬に襲われても逃げられないよ」

心配は現実のものとなった。異変に気が付いたのはうちの娘である。

「ドン君が怪我してる」

急いで外に出てみると彼がSさんに抱かれていた。腰部の毛が五百円玉大にむしり取られ、露出した皮膚の真ん中に二センチ程の傷がある。既に血は固まっていたがなんとも痛々しい姿だ。Sさんが言う。

「他の猫にやられてね。この子は喧嘩が弱くて」

現場に居合わせなくても状況がわかるらしかった。喧嘩に自信があるのと、面と向かって戦うから顔や前脚の傷が多い。弱い猫は逃げようとし

て後ろから攻撃され、下半身に受傷するとのことであった。

「やられたのはこれで三回目なんですよ」

Sさんの悲しそうな顔を見るとこちらまで気持ち沈んでくる。

明くる日ドン君を見て私は絶句した。いつもの首輪に紐がついている。紐の先にはSさんが。

「どうしたんですか」

「いやね、こうやって一緒にいれば襲われることもないだろうと思って」

確かにそうだろうが、猫に紐とは——。ドン君が進もうとすると紐がピンと伸びる。Sさんが引つ張られる。なんのことはない、猫が人を連れて歩いているのだ。前代未聞の光景であった。

ただでさえ気ままな猫のこと。ストレスが溜まって毛が抜け落ちるのではない、運動不足でこれ以上太

つたらどうしよう、と気がもめることこの上ない。わが家の女性陣にも紐はすこぶる不評である。

「ねえ、なんとかならないかしらね。あれじやあドン君が可哀そうよ」

結局のところSさんには全権大使として私が申し入れることになった。「どうでしょう、紐。一度はずしてみては。怪我も治ったことだし、」

とんでもない、と睨まれた。

「この子は私がいるから安全なんです」

始末の悪いことに奥さんまでが紐賛成派だった。飼い主でもない私としてはそれ以上懇請することはできない。

不思議なことに何日かすると、紐付き猫もさほど奇異には感じられなくなってきた。慣れとは恐ろしいものだ。あれはあれで自然なのだとさえ思うようになっていたのだ——あ

の夢を見るまでは。

夢というのはこうである。ドン君がいる。立っているのでもいつもより大きく見える。両足の白足袋も両手（もはや足ではない）の白手袋も鮮やかだ。右手に握っているのは赤い紐。紐の先にはなんと、Sさんが繋がれていた、しゃがんだ姿勢で。立場は逆転した。胸を張ったドン君の誇らしげな顔。一方Sさんはと見ればこれまた目を細め、頬をゆるめて至福の表情を浮かべているのではないか。はて面妖な。なんという夢だろう。いくらSさんが幸せそうだとはいっても尋常の構図ではない。私は目覚めると同時に打ち消すように手を振った。



それから半年ばかりは何事もなく過ぎた。年も改まり、寒さが一段と

厳しくなった頃、Sさんの姿をぱったりと見かけなくなった。同時にドン君も——。いったい何が起こったのか。私たちは噂した。「もしかしたら具合でも悪いのかね」

娘さんが来たときに思い切って聞いてみた。やはりSさんは入院していた。病状はあまり思わしくないといい。二か月ほど前から体調がすぐれなかったらしい。

「父は病院嫌いで」娘さんが残念そうに話していた。ドン君は彼女の家に連れて行って世話しているとのことであった。

「家に帰りたい」たつての希望でSさんは退院した。ドン君も家に戻り、Sさんがあの世に旅立つまでの十日間を一緒に過ごした。二人の間でどんな会話が交わされたか、今となつては知るすべもない。Sさんが亡くなった後、奥さんとドン君は娘さん

の所に引つ越していった。家は空きのまま残された。



そろそろ一年になる。あれ以来ドン君とは一度も会っていない。山吹の木の下からひよっこり出て来るのではないか、電柱の向こうであの立派な尻尾を覗かせているのではないか。いないとわかっていても私の眼は彼の姿を探している。

Sさんは遠い空の上からドン君のことを見守っていることだろう。もちろん奥さんのことも、娘さんのことも。相変わらず声をかけているかもしれない。

「外出の時は紐を付けなきゃダメだよ」

そんな時ドン君は空を見上げる。白い手を伸ばし、あの可愛い声で「ミャー、ミャー」と応えるのだ。

それは人間の言葉に直すときつとこのような意味だ。

「お父さん、僕強くなつたよ。もう喧嘩にも負けない。お母さんのことは僕に任せておいて」



「早く楽にしてください」

浜名 新

年々、ガン患者の終末期を療養型病院で全うさせようとする家族が、以前に比べ多くなってきた印象が強い。ガンはどの臓器にも発生する。現在、長寿社会であるが故に、2人に1人がガンに侵されるという。臓

器により、ガンの組織型により、その悪性度、進行度はマチマチである。悪性の進行ガンの場合、転移は存在すると考えなければならず、ガン性疼痛を併発することが多い。まれに痛みを感じない人もいるが…。疼痛がひどければ麻薬を使用せざるを得ない。病期、病状によるが、転移ガンでは療養型病院に転院して1か月以内に亡くなる人が多い。

水分栄養補給に関して、まだ口から食べられる人、体内に留置された栄養管から注入を受ける人、中心静脈カテーテルから高カローリ輸液を受ける人、手足の静脈から細々と受ける人、手足の静脈系からの投与が困難な場合には皮下注射で水分を補わざるをえない。

意識清明の患者では、ガン治療後、ガンの再発あるいは飛び火（転移）に怯え、不安はつきまとう。きつい

闘病生活から逃れたい願望が昂じれば、やけくそになり死にたい願望が芽生え、命を絶とうとするかもしれない。大多数の人は理性が働き、実行は抑制されているが・・・。

担当したガン患者、家永(仮名、60歳前半、男性)さんとの一期一会が偲ばれる。

病気の始まりは、喉(のど)の違和感・呑み込み困難で近医を受診し、築地のがんセンターを平成*年暮れ紹介されて受診し、内視鏡検査などで食道ガンと診断され、加療のため同センターへ入院している。食道切除・頸部食道ろうを造設。*年はじめ胃管再建術を受けている。術後後療法として化学療法を2クール受けた。入院中9月心停止が数秒続いたため、担当医の紹介で千葉の専門病院に短期間入院し人工心臓ペースメーカーを植えこむ手術を受けた。

*年2月故郷、某市にある某病院へ入院し、抗凝固療法を試みたが、副作用で中止。術後経過良好と思われたが、*年4月頭頸部の皮膚の多発腫瘤を認め、バイオプシー(生検)で食道ガンの転移と診断された。そこで、医師の勧めで、*年盛夏サイバーナイフ照射を受ける目的で神奈川県某病院放射線科を紹介されて受診した。放射線科医師から照射の内容の説明を受けた。自分で見て触れた皮膚転移腫瘤が、その照射で跡形もなく消失すること本気で祈念して、照射療法を受諾した。だが、通院していくうちにサイバー照射のダメージ、ガン病巣の進展、当時まだ知らされていなかった併発症に、じわじわ攻められて体力を消耗して、通院に支障を来たし入院した。

家永さんは真面目で、ワンマンで、

自分の意思を貫く強靱な精神面を有していたようだ。だから、妻や息子は、夫の決めたことに対しては、本人の意思を尊重するしかなかった。病気についての治療法の選択・決定は最終的に本人の意思が優先される。妻は家計を助けるため、一念発起して介護の勉強を始め介護士になり、それ以来介護関係の仕事が続けられているようだ。

サイバー照射で体力が弱り、口から食べて・呑み込む動作に時間がかかり、食べられる量が極端に減り、経口摂食で体力・栄養を賄いきれなくなった。そこで、医師は水分栄養保持の方法として、胃腸系の管留置を避け、中心静脈にカテーテルを挿入して、中心静脈栄養を勧めた。応諾し*年2月右鎖骨下静脈から中心静脈ヘカテーテルを挿入し、CV(中心静脈)ポートの植え込み術

を行った。それ以来、CVポートから高カロリー輸液、1日8000Kカロリーを受け、同時に、お楽しみの食事を適時してきたそうだ。

療養型病院に転院してきた際、家永さんは意識清明で、手足の麻痺は無く、右の上肢の付けね（腋窩）のリンパ節の転移で、リンパ液の流れが悪く、上肢のむくみと痛みのため運動制限があった。彼は物事の理解・判断ができ、自分の意思を相手に言葉で伝えられた。

入院時検査として採血、尿検査、心電図、胸のCT撮影、胸と腹部の単純撮影などを行った。病状を考慮して、BNP、CEA、HbA1C、血液型検査を外注した。身長170cm弱のわりに体重43kg弱と、体重減少がひどくなっていた。

血色素量4.1g/dl、血清鉄26μg/dl、赤血球数144（×万／

μl）で、鉄欠乏性低色素性貧血が推定され鉄剤を処方した。ガンマーカーであるCEA（癌胎児性抗原）は13.9（正常値5ng/ml以下）でガンが増勢を示唆した。心臓ホルモンであるBNP（脳ナトリウム利尿ペプチド）は597（正常値18.4pg/ml以下）と異常高値で、心不全の併発・増悪を示したため利尿剤を処方した。心電図検査では、頻脈性の心房細動を示し、脈は120／分以上で抗頻脈剤を処方した。胸のCT所見として、心肥大、左右に胸水貯留があり、肺容積量の減少が認められ、肺内の転移巣はなかった。

食事の配膳の有無を尋ねると、「配膳してください」と食べる意欲を示した。そこで、全粥・ミジン（副食）各1／3量と、リンゴ・野菜ジュースをつけて食事箋を処方した。中心静脈栄養で満腹感があり、ベッドサイドに配られた配膳内容を目視すると、食欲はとたんに霧散し、手をつけなかった。たまに気分がよいと、リンゴジュースと野菜ジュースなど1口くらいの飲み込んだようだ。「配膳、とめますか」と尋ねると、「とめないでくれ、配膳されなければ食べたいときに食べられないではないか」とえらい剣幕であった。病気に負けない気の強さを示した。ガンと戦うには精神の強靱さが求められるようだ。

前院での入院生活期間が長引いたためか、四肢・体幹の筋力は廃用性に衰え、体重が減り、右液窩から胸、上肢にかけての疼痛で日常生活動作は制限されていた。それでも、歩けるからとベッドから降り、立位で点滴台を持ち、常設したトイレの場所まで歩いていった。だが往復で息苦しく、どきどきして、青息吐息とな

り、自ら体力の低下と病気の進行を自覚させられ、トイレに行く回数が次第に減った。

仰向きに臥床するのが大変苦しく、半座（起座）位で、頭をオーバーテーブルにつける奇異な姿勢を維持していた。「半座位の姿勢が一番楽になります」と真顔で言う。もちろん着替えとか、尿器や便器をあてがうとき、ナースや介護士の指示で姿勢を代えなければならなかった。トイレで排尿・排便をしたい意欲があるものの、息切れするため部屋に簡易トイレを用意した。入眠するときベッドを平らにして休んだようだ。

極度の貧血、心不全、胸水貯留、肺容量の減少などから起座呼吸姿勢が1番楽な姿勢のようで、亡くなるまで変えなかった。つまり、座位で腰を曲げ、頭をオーバーテーブルにつけている姿勢を最期まで貫いた。

以前、化学療法ならびに放射線療法で高度貧血になり輸血暦があった。今回も強い貧血状態で、「輸血すれば

元気になる、生きる意欲がわくかもしれない。このままではだめになつてしまう。輸血を受けますか」と尋ねると、「お願いします」と応えた。

つらかったのであろう。入院間もないころで意識は清明で、日に日に病状は厳しくなり、貧血を指摘され輸血で元気になる生きようと思つたにちがいない。「輸血を2単位、2日間で4単位おこなう予定です」と計画を伝え、輸血承諾書に彼自身で署名してもらった。週明けに輸血を2日間で終了。血色素量が7 g/dlに増加し、ひと息ついた。

家永さんは4人部屋を選択した。部屋には見ず知らずの3人の寝たきりの、経管栄養を受けていた患者たちがいた。この光景に耐えられな

ったのかもしれない。輸血がすすむと個室希望を願ひ出た。新病棟の2階の個室に転出した。

転移ガンによるガン性疼痛が病人に試練を与え、精神状態を微妙に変化させていく。ガン性疼痛に対して、トラムセツト配合錠が1日2回（朝・入眠時）処方されていた。3月末から4月になると38度前後の発熱が時折見られた。CVカテーテルによる感染というより、腫瘍熱と推定し、抗生剤の投与をあえてしなかった。なぜか入浴を嫌がり、拒否された。内服の鉄剤を当初我慢して服用していたが、気分不快で吐くので中止。注射剤に変更し、点滴で静脈投与し14日間使用した。

入院2週間ごろ、心境の変化なのか、「麻薬を使いたい。先生に伝えてください」とナースに頼んだ。担当のナースは、「了解です。でも意識

レベルが低下するかもしれないわよ」
と軽い気持ちで言うのと、

「承知しているさ。痛みも和らぎ、早く逝(ゆ)くには、それしかないだろう」と真顔で応えたという。その頃、自分の終末期が近づいているのを、闘病生活、現在の体調の変化から感じとっていたのかもしれない。その日午後、たまたまお見舞いにこられた妻が部屋にいた。そこで僕は夫妻に伝えた。

「ご主人は麻薬使用を希望されております。はじめて麻薬を使うので、薬剤師から本人に麻薬の段階的使用方法の説明をもらうことにしました。奥様も同席してお聞きください」

薬剤科の主任は説明した。

「麻薬使用で呼吸不全、意識障害など、想定外のこと起きることが報告されております。初めて使用する

場合、段階的に使用されるのがいいでしょう。作用の軽めの坐剤から始め、効果が薄ければ、舌下錠剤を追加します。いきなり強い貼付剤を使わないほうがいいでしょう。ご了承ください」

家永さんはしばらくして、

「坐剤は嫌だけど、やむを得ないか」と小声で呟いた。

アンペック 10 mg 坐剤、朝・夕から開始した。本人はアナルへの挿入を嫌がったが、最終的に承知してくれた。効かない場合、アブストラル 舌下錠 100 μ g を適時追加した。

次第に尿器をあてがわれ排尿する行為をわずらわしく、嫌がるようになった。

「毎回、ナースコールでナースを呼び、尿器で小水をとるのがきつくなってきた。管を入れて下さい」とナースに伝えた。

担当ナースから報告を受けた僕は、その日の午前、留置バルーンを挿入した。苦痛や出血もなく留置できた。しかし、その後、尿漏れで、オムツやシーツを汚してしまい、結果的に病人に迷惑が及んだときもあったようだ。

その頃から、ガン性疼痛で、精神の変調を来したのか、ナースや僕に愚痴るようになった。

「早く楽にしてください！」
本当はここに入院するのではなく、自宅に戻り、家族とともに過ごしたかったんだ。入院してから毎日行うプロジェクトの実施はもうごめんだ、こりこりさ。自由がないし、時間が来ると検温ですか脈や血圧、酸素飽和度の測定で、ああしろ、こうしろといわれてね。やらなきゃと頑張っても、だんだん体が弱ってくるし、対応がのろくなってるね。ナースは仕

事の感覚で言われる。『馬鹿やろう』と大きな声が出てしまう。じぶんで分かっているんだ。もう治る見込みなんかないさ。プロジェクトが行われるのを見てみると、自分がみじめになるだけだしな……。こうなりや、強い麻薬で、永遠に醒めなくして欲しいね。深い眠りに入り、早く楽になりたいんだよ……。』

4月中旬、ガン性疼痛のため、頓服の麻薬舌下錠を服用する回数が増えてきた。

あるとき、ナースが部屋に行くと「口が渴いてね、水をください。今、体が暗い穴に落ちてしまうように感じ、すごく不安です。ここにしばらくいてくれませんか」と懇願するときもあつたそうだ。ゆっくり水を飲み、口の渴きを癒し、ナースにそばにいてもらうことにより、揺れ動く精神が、落ちついたのかもしれない。

ない。「お迎え現象」とも違うが、死期の臭いを感じ、死の不安から逃れたかったのかもしれない。

本人は強い麻薬を希望したので、僕は麻薬の変更を伝えた。

「デュロテップMTパッチ² 1 mgの貼付剤に変更します。72時間おきに更新します。13日・16日・19日使用し、22日からデュロテップMTパッチ⁴ 2 mgへアップしていきます。効果薄ければ舌下錠を併用してもらいます」

「ここに来るんじゃないかった。先の病院から直接自宅に戻り、家族と最期を過ごしたかった。もう、全てのプロジェクトをやめてください。お願いします。実験はもういいです。早く楽にしてください!」と家永さんは真剣に心情を吐露した。

「ハイ、承知しました。強い麻薬を使います」ともいえないでしょ

う。奥様にお伝えしましょうか」と僕はとっさに応えた。

以前、某大病院でおきた「安楽死事件」を思い出したからだ。

その後何日か経て、ナースが麻薬の貼付剤デュロテップMTパッチ⁴ 2 mgを張り替えに、ベッドサイドに伺い、

「麻薬の貼付剤を張替えに来ました。よろしいですか」と了解を求めると、

「貼付剤、もう要りません。定期的に飲む薬も要りません」と強い口調で言い返した。強い拒薬に、ナースは途方にくれ、彼の心境に何かが起きたに違いない」と思った。

翌日、夜勤のナースが夜中に見回りに伺うと、

「お金あるかな。銀行でおろさないと……。そこにいるのは誰ですか:」

「家永さん、とつくに夜中ですよ。

体がすぐく傾いて、倒れちゃいますよ」と彼の体位を正した。

観察すると、家永さんはため息するような呼吸で、手足の爪の色はチアノーゼ色に変化し、手足が冷たくなっていた。ナースは、病状の増悪を診て、「どうしてなの、やばいな」と呟き、言葉をかけた。

「辛かったでしょう。直ぐ酸素吸入して、モニターをつけます」

酸素の管を鼻の穴に差し込まれ、モニターの端子を胸に装着されると、彼は無言で、目を閉じていた。意識が薄らいでいたのかもしれない。

「家永さん、家永さん、しっかりして！」とナースは必死で呼びかけた。少し経つと、気がついたのか、

「水下さい。部屋少し寒いね」とボソツと言った。

ナースは空調の温度を上げて、コップに水を入れて、差し出した。

彼はコップを手にも、ゆっくり、味わうようにすこしずつ飲みこんだ。

「眠くなりました。少し眠ります。このままの姿勢でいいさ」と小声でひとりごちた。

夜勤のナースは第6感が働き、もうあぶないのかしら」と悪い予感がした。だから仕事の合間に、病室に入り家永さんを観察するようにした。病棟の朝は忙しい。

夜勤はぎりぎりの人数（看護師と介護士）で担当している。

6時の検温（脈、血圧、酸素飽和度を測る、ときに吸引などする）が始まる。患者数が多いので時間がかかる。それがすむと朝食の準備をしなければならぬ。経管栄養の準備と注入の開始である。今度は口から食べられる人を食堂の定位置に車椅子で待機させねばならない。配膳車が到着すると、各人のトレイを配膳

しなければならぬ。そして摂食の介助は仕事のうちである。

朝食を食べさせたのち、夜勤のナースが家永さんの部屋に伺った。

家永さんは、あごを上下に動かして、不規則な息をしていた。大きな声で呼びかけても反応はなく、こんな睡眠状態へ陥っていた。次第に自力呼吸は消失し、脈も触れなくなった。だが、人工心臓ペースメーカーの作動で、モニター画面に心電波形と心拍数の数値は、消失することはなかった。――苦しまないでよかったわ。ペースメーカーは電池切れしなければ、作動し続ける構造になっているそうだ。

その日早番勤務で7時半に出勤した僕は、8時過ぎナースから家永さんの急変を告げられ、診察のため部屋に入った。

仰向けに臥床していた家永さんは、

「深こん睡状態で、すでに瞳孔は開き、光の反応はなく、眼球は正中位置に固定し、眼頭反射は無かった。自力の呼吸は無かった。念のため、テッシュの紙片を鼻腔にあてがい、呼吸による動きを観察した。吸気・呼気とも、紙の動きも、胸の動きも無かった」

だが、モニター画面に心電波形と脈拍の数値は消えることはなかった。臨床的な「死亡」と確認した。2年間強、ガンと真摯に戦った家永さんに「がんばりました、安らかにしてください」と深々と合掌した。

ナースから緊急連絡を受けた妻は、午前10時過ぎ部屋に入り、夫と対面し、見取った。同席した僕は、その時刻を死亡時刻として、死亡診断書を作成した。(H 27・7)

チエーホフを読む (8)

イオーヌイッチ

藤倉 一郎

チエーホフ38歳の時の作品で、晩年の小説である。医師が主人公で郡医病院で働き、開業して、患者が増え、忙しくなり、飲食と金にしか興味がなくなり、若い頃あこがれていた人に会っても、まったく人間的な魅力を感じなくなり、孤独にひたすら働いて、食べて飲むだけである。若き日の理想を失った医師の姿がみえる。

県庁所在地S市におけるトゥールキン家は知事公舎のすぐ隣の立派な屋敷で、主人はイワン・ペテロヴィッチと言い浅黒い美丈夫で、冗談や洒落が好きだった。妻のヴェーラは小説を書いて、客の前で朗読をする

のが趣味だった。娘のエカテリーナはピアノが堪能でピアノリストを夢みていた。明るい気のおけない人々だった。郡会医になったばかりのスタールツェフ・ドミトリ・イオーヌイッチはイワン・ペテロヴィッチに招待されたのでトゥールキン家を訪ねた。エカテリーナは18歳で母似のほっそりした愛くるしい女性だった。

沢山の来客が集まってきた、ヴェーラが自作の小説の朗読をした。次いで娘がピアノに向って、はげしくたたきつけるような音楽をつづけた。

夜食になるとイワンが一口噺や洒落や滑稽な謎々を出して一同を楽しませた。2里あまりの道を歩いてイオーヌイッチは自宅へ帰った。まだ自分の馬車がなかったのだ。

1年程して忙しい毎日を過ごしているときヴェーラが片頭痛に悩まされていたが、娘が音楽学校へ行くと

いうので、発作がひどくなり郡会医に往診を依頼してきた。それで一度往診して以来、ヴェーラがイオーヌイッチを名医だと皆に吹聴するので彼はしばしばトゥールキン家を訪ねるようになった。ある時エカテリーナのピアノを聴き会食をした後、彼女を誘って庭に出て、「あなたに1週間もお目にかからなかったら、私はあなたにお会いしたくてたまりませんでした」といった。彼女が彼を魅了したのは、その新鮮さ、目や頬のあどけない表情、服の着こなし、無邪気で、非常に聡明にみえたことだった。彼女はまた読書家で沢山の本を読んでいた。エカテリーナは突然立ち上がると彼の言葉を聞かず、彼の手に紙きれを渡して家の中へ駆け込んでしまった。紙きれには「今晚11時に会いましょう。墓地の記念碑のそばにおいで下さい」と書いてあ

った。墓地は遠い郊外にあるので、エカテリーナがからかっているのかと思いつながら、時間が来るとソワソワして、馬車を出して郊外へ出かけた。このときはもう2頭立ての馬車を持っていた。月夜だった。馬車を横町において歩いて墓地へ行った。人影はなかった。だれがこんな真夜中に、こんなところにやってくるだろうか、2時間も待っていたが、突然月が雲にかくれて、あたりが暗くなったのでスゴスゴと、馬車に帰った。

翌日結婚申し込みにいったが、エカテリーナは舞踏会に出かける用意をしていた。舞踏会へ行くのを馬車で送りながら、イオーヌイッチは「夕べ墓地へ行きましたよ」というとエカテリーナは「冗談がわからない人ね」というのであった。イオーヌイッチはいったん自宅へ帰ったが燕

尾服を着て舞踏会に出かけた。エカテリーナを見つけて、彼女にプロポーズしたが「あなたを尊敬してませんが、わたしはあなたの奥さんにはなれないのです。わたしは音楽を愛し、それに一生を捧げるつもりなんです」と言って姿を消した。その後彼は何も手につかず、食事もしないし眠りもしないで、悶悶としていたが、エカテリーナが音楽学校に入ってモスクワに行ったという噂を聞いてやっと落ち着いてきた。

4年後イオーヌイッチは患者も増え、毎日宅診をしてから往診に出かけた。馬車もトロイカになり、かなり肥満になっていた。カルタ以外は金をためるしか楽しみもなかった。ある日病院へヴェーラから1通の手紙が来た。「ぜひお越しください。わたしの悩みを和らげてください」そして追伸に「ママのお願いにわたし

も加勢します。エカテリーナ」

それでイオーヌイチはトゥールキン家を訪問した。ヴェーラはめつきり年をとって白髪になっていたが、エカテリーナは一層きれいになっていた。しかしかれはエカテリーナの微笑も声も衣裳も肘掛椅子までも気に食わなくなり、この人と結婚しなくてよかったと思った。二人は4年前と同じように、庭に出て語り合った。「あなたは私が会った人の中で一番立派な方です。お仕事も生活も高尚な目的があります。私はピアニストなんかじゃありません」

イオーヌイチは食事もしないで、別れの挨拶をした。

3日後エカテリーナから手紙が届いた。「ぜひお話したいことがありますので、おいで下さいませ」しかし、忙しいからと言いついて、二度とトゥールキン家を訪ねなかった。

イオーヌイチはますます肥って、患者はますます増え、領地があつて、町に持家を2軒も持っていた。気難しくなり、患者を診る時もプリプリしていて、感じの悪い声でどなりたてるのであつた。彼は孤独で退屈で興味をひくものがなかった。クラブでカルタをやり一人で上等なワインを飲みながら食事をした。

トゥールキン家ではイワンが一口嘶や洒落をいい、ヴェーラは自作の小説を朗読し、エカテリーナは毎日4時間ピアノを弾いている。彼女も年をとって、秋になると毎年クリミヤへ母と一緒に静養に出かける。

イオーヌイチはエカテリーナに恋した後、恋することもなく、ひたすら馬車馬のように稼ぎ、金を貯めて守銭奴になり、脂ぎってふてぶてしくなってしまう。エカテリーナ

に恋したころの面影は全くない。理想に燃えていた青年医師がこんなに変わってしまったのが悲しい。多かれ少なかれ開業医の姿が見えるので、むずがゆい思いである。

日本軍による

食糧の現地調達

松崎 茂

はじめに

日中戦争は昭和12年7月に始まり、太平洋戦争は昭和16年12月に起こり、昭和20年8月の終戦まで続きました。昭和6年9月に始まった満州事変を含めると、昭和の15年戦争と言われています。この間に多くの戦場で、武器弾薬の輸送だけでなく、糧秣の確保にも大変な苦勞をし

ました。「戦争とは輸送である」とま
で言われているながら、日本軍のロジ
スティックスの考え方に、連合軍と
は大きな隔たりがありました。

前線で闘う将兵よりも、武器弾薬
や食糧を運ぶ輜重兵は何倍も多くな
ければ、作戦を円滑に遂行すること
は不可能です。日本軍は輜重兵が絶
対的に不足していましたが、その重
要性はあまり認識されませんでした。
「輜重輸卒が兵隊ならば、チョウチ
ヨ・トンボも鳥のうち、輜重輸卒が
兵隊ならば、電信柱に花が咲く」と
前線の戦闘員には揶揄されていました。
前線で闘う将兵が偉いと考えら
れていて、補給に当たる兵士や軍属
は軽視されていました。さらに、「ボ
ロ士官の捨て所」と言われていた通
りに、輜重将校で大将になった者は
いませんでした。

食糧の確保方法

戦場での食べ物の確保のためには、
本国から輸送するのが原則です。太
平洋戦争の開戦直後は、船舶も潜水
艦も充分にありましたので、将兵の
食べ物に困ることはありませんでし
た。ニューギニア戦線で闘った恩師
も、開戦当時は米が十分にあったと
話していました。しかしながらしば
らくすると、輸送が思うように行か
なくなり食糧が不足するようになり
ました。特に大陸や島の奥地には、
食糧が届き難くなり、食糧不足に悩
まされるようになりました。ガダル
カナルは餓島と呼ばれるほどに、食
糧不足による飢餓が問題となりました。
この島では日本兵は2万人も死
にましたが、戦死は5千人ほどで、
残りは餓死と戦病死でした。栄養が
十分に摂れていれば、戦病死もこれ
ほど多くはなかったと推測できます。

食糧を確保するためには、現地調
達という手段がとられました。軍票
を使って食糧を購入する方法があり
ましたが、これは必ずしも現地の
人々からは喜ばれませんでした。そ
れは軍票が容易には換金できないか
らでした。汪兆銘の南京傀儡政府発
行の通貨もしぶしぶ受け取られまし
た。むしろ日本円の方が喜ばれたそ
うです。ただし、塩と交換した場合
は、現金以上に喜ばれました。塩は
現地人を雇って荷物を運ばせる時な
どにも、賃金の代わりとなりました。
これは中国だけでなくフィリピンな
ども同様でした。

戦場で住民が避難した後、米やイ
モ類などの食糧を隠してある所を見
つけると奪ってしまうことがしばし
ばありました。経験を積んで行くう
ちにニワトリやブタなども、その隠
し場所を容易に見つけられるように

なりました。これは戦利品と考えて、奪つても罪悪感はありませんでした。また、収穫直前の稲や麦は刈り取つて自分たちの食糧としました。南方では稲穂だけを保存することが行われていましたので、その脱穀と精米には苦労しました。時には鉄兜に稲穂を入れて、棒で根気よく突いて食べられるまでに精米しました。

それ以上の悪事は、武器で脅して食糧を強奪することでした。「米を取り上げられると、私たちは生きていきません。どうか取らないで下さい」と現地の人々が手を合わせて哀願することもありました。それでもそれを無視して、食糧を奪つた日本兵もいました。このような残虐なことをしたために、民衆から憎まれたのは当然だったと言えるでしょう。単身で食糧を探しに行き、隠れていた住民に殺されてしまった兵士もいました。

ベトナム戦争では、米軍はベトナムに食糧が渡ることを嫌つて、米を焼き払う作戦を行いました。このような行為は、ベトナム住民から米軍が憎まれることとなりました。住民の信頼を失つてしまえば、戦争に勝利することはできないことがわかります。

小さな島では、田畑の作物で現地の住民を養うのがやつとでした。そこへ日本兵が何千人も上陸したら、食糧が不足してしまうのは目に見えています。敵方の攻撃のために補給する輸送船も近付けず、運よく潜水艦による食糧の補給ができてもしっかりとしたものでは微々たるものでした。そのためサツマイモやカボチャを植えて、飢えを凌いだ島もありました。米軍は上陸せず、時々空爆するだけで終戦まで置き去りにした島もありました。そこにいた日本兵は空爆で、手塩に

かけた作物が荒らされた時には本当に米軍を恨んだそうです。その典型的な例は、赤道直下の21平方kmのナウル島という小さな島に駐留していた軍医からその恨みと苦しみを聞いたことがありました。このような南方の小島では、農耕班と漁労班とを結成し、それぞれの特長を活かして食糧確保に精を出しました。沖縄出身者は漁法を熟知していて、どの魚が食用になるかもよく知っていました。

日本軍は自然に存在するあらゆるものを、食糧にできるとなれば利用しました。椰子やバナナの実はもちろんのことながら、その葉まで食べました。その時に木を切り倒すと、現地の人々からは恨まれました。

現地の住民から謙虚に学ぶことができたなら、食糧難もかなり解消されたと考えられます。熱帯地方では、

種々の植物の球根から澱粉を抽出する方法を知っていたなら、餓死も随分減っただろうと考えられています。例えば、クワズイモはサトイモ科で一見食べられそうですが、シュウ酸カルシウムを含むので口に入れることもできない程の刺激性のもんです。しかし、よく晒せば食べられるそうです。その他の球根の中にはアルカロイドを含んでいるために、そのままだけは食べられないものが数多くあります。サゴ椰子の幹に含まれる澱粉を大切な食物としていますが、現地の人々は、1週間も水に晒してあく抜きをするを知っています。日本でもトチの実の毒抜きは知られています。江戸時代までは飢饉の時には有毒なヒガンバナの球根まで食べました。この場合も時間をかけて水に晒しました。ソテツの実も同様にして飢餓時には食べられました。

開戦前の日本では熱帯地方での食糧確保の研究がほとんどなされていなかった。植物からどのようにして澱粉を取ったらいかがは知られていませんでした。もし、その方法を熟知していたら、多くの将兵の命が救われたであろうと考えられます。ある軍医は、植物や魚を自ら試食して食用に適するかどうかを調べました。その所属部隊はお陰で、駐留地付近にあるもので食糧を確保することができました。それとは逆にある所で、得体の知れない卵を食べた数名の兵士が翌日には全員死んでしまったという例もあったそうです。

動物性タンパク質源としては、四足の獣が一番好まれました。それだけでなく、ヘビ、トカゲ、ワニなどの爬虫類も食糧にされました。ワニと大蛇が喧嘩しているのを見つけて、両方とも捕まえて食べてしまったと

話した男性もいました。トカゲは1mに近いような大型のものだけでなく、日本でも見られる小型のものまで食べてしまいました。カメや椰子カニ、カタツムリより大きなマイマイも手に入れば食べました。海や川の魚は爆薬を水中で爆発させて、浮かんで来たのを集めました。現地では幾種類もの昆虫も食糧としていましたが、日本軍はその食べ方を知らなかったようです。甲虫類のなかでもカブトムシの幼虫は食用になりますが、米軍はこれが非常食として食べられることを教育していました。

塩が手に入らない内陸にいた兵士が塩を口にした時には、甘く感じたそうです。ニューギニア奥地からやつのことで海に到達した時には、海水をガブガブと飲んだ日本兵もいたそうです。

戦場で獲得できる敵方の食糧も、

現地調達目標とされました。逃走して置き去りにされた食糧は、格好の戦利品でした。インパール作戦の時には、落下傘で投下された食糧は「チャーチルの贈り物」と呼ばれ喜ばれました。滅多に食べたこともないようなハムやチョコレートは非常に珍重されました。しかし、それを手に入れるためには大変な危険も冒さなければなりませんでした。事実、それを取りに行つて銃撃されて兵士もいました。

飲料水の確保

水はどこにでもあります、戦地で飲料水を手に入れるのは容易なことではありませんでした。井戸や湧水から清い水が得られることは稀でした。そこで、給水班が煮沸したり、さらし粉を使つたり、濾過して汚れた水でも飲めるように工夫しました。

熱帯地方ではサルモネラ菌が常在している、うっかりすると下痢を起こしてしまいます。夕方の炊飯の時に、クリークの水を使つたところご飯が赤飯のように赤くなつていたと語つた人に出会いました。数多くの戦死体がクリークに投げ込まれていたためだったそうです。このような清潔な水を手に入れるのは、戦場では至難の業でした。

おわりに

日本兵は戦争初期を除き食糧不足に悩まされたので、どんなことをしてでも食べ物を確保したいと思つたのは無理もないことです。「各部隊ハ極力現地自活ヲ達成セラレタシ」という命令が大本営通達で伝えられていました。このようなことから日本軍は暴力的な現地調達も多くの場合、良心の呵責もなく行つたよう

す。

慰安婦問題や南京虐殺は事実を歪めて、現在は誇張され喧伝されていますが、これらは必ずしも真実を伝えていません。しかし、現地調達という暴挙は、作戦の一環として行われものですが、どれほど一般民衆を苦しめたか計り知れません。極端な場合は、直接殺さなくとも民衆の飢え死につながつたこともあつたと考えられます。この点の反省は日本では不十分と思います。連合軍は後方支援の重要なことを知つていたので、物資を運ぶために徴用された民間の船も攻撃の対象となりました。悔しくても、制空権も制海権も失つた日本軍はどうすることもできませんでした。

食糧だけでなく、衣類を初めとして武器以外の必需品も勿論不足しました。例えば、日本軍は足に合わない

いで靴で一日30キロも行軍したので、どれほどか苦労したかわかりません。自分の靴が擦り切れると、戦死した友軍の靴を取って履いたそうです。その上、武器も不足しただけでなく時代遅れなものを使って闘いました。緒戦の勝利で戦線を拡大し、物資の補給が追いつかなくなってしまうたのが原因でした。食糧の補給にもつと意を用いていたら、餓死や戦病死も減らすことができたでしょう。さらに早目に講和が結ばなかったために、兵士がただけ苦しんだかわれませんか。これからも戦争がいっ起こるかわかりません。前の大戦を教訓として、愚かな戦争は避けるべきです。

老婆は一日にして成らず

豊泉 清

表題をご覧になって「ローマは一日にして成らず」のパロディーだなと瞬時に閃いたと思われる。高校の英語の授業で、*Rome was not built in a day*（ローマは一日にして成らず）と、*All roads lead to Rome*（全ての道はローマに通じる）と、*When in Rome, do as the Romans do*（ローマへ行ったらローマ人のする通りにしろ）という、ローマが登場する三つの格言を教わった。ローマへ行ったら……は「郷に入りては郷に従え」に相当する。ローマはイタリアの首都である。そこでイタリア語ではこれらの格言をどう表現しているのかという疑問や興味を抱き、イタリア語辞典を播きながら英語や日本

語と比較してみた。

◆*Roma non fu fatta in un giorno.*

「ローマは一日にして成らず」

◆*Tutte le strade conducono a*

Roma.

「全ての道はローマに通じる」

英語と全く同じ表現である。

◆*Quando a Roma vai, fa come*

vedrai.

「ローマへ行ったら、見た通りにしろ」

英語は「ローマ人がするように」と表現しているが、イタリア語は「見た通りに」と表現している。

◆*Non importa andare a Roma per la penitenza.*

イタリア語辞典のローマの項目には「戯侮（ざんげ）するためならローマに行く必要はない」という格言も載っており、「善行はどこでも出来る」という解説が添えてある。

◆Una rondine non fa primavera.

「一羽の燕では春にならない」

一羽の燕が飛んでいるのを見て「もう春だ」と決め付けると、翌日急に冷え込むこともある。早とちりの戒めである。One swallow does not make a summer (一羽の燕では夏にならない) という同じ内容の英語の格言を高校の授業で教わった。イタリア語は春、英語は夏と表現している。

◆Pietra mossa non fa muschio.

「転がる石には苔が生えない」

◆La goccia scava la pietra.

「点滴石を穿つ」

やはり同じ内容の英語の格言を教わった。

◆Chi due lepri caccia, l'una non piglia e l'altra lascia

「二兎を追う者は一羽は捕らえず、もう一羽には逃がられる」

「二兎を追う者一兎をも得ず」と同じだが、イタリア語は「捕らえない」と「逃げられる」と、異なる動詞で表現している。

◆In viaggio si desidera compagnia, nella vita la pietà.

「旅行には仲間が欲しい。人生には同情が欲しい」

pietà は訳し難い単語だが、他人に対する思いやりという概念のようである。日本の「旅は道連れ、世は情け」に相当する内容と思われる。

◆Chi ha denti non ha pane, chi ha pane non ha denti.

「歯がある者にはパンがない。パンがある者には歯がない」

丈夫な歯と美味しいパンが同時にあれば百点満点である。「天は二物を与えず」のイタリア版である。

◆Non vendere la pelle dell' orso prima d'averlo ucciso.

「熊を殺す前に熊の皮を売るな」日本の「捕らぬ狸の皮算用」と瓜二つの内容である。イタリア語には熊が、日本語には狸が登場する。

◆Le bugie hanno le gambe corte.

「嘘は短い足を持つている」

「短い足」とは、走るのが遅くて直ぐ捕まるという比喻から、嘘は必ず露見するという意味になる。

◆Il diavolo fa le pentone ma non i coperti.

「悪魔は鍋を作るが蓋は作らない」蓋の無い鍋で料理を作ると、匂いが漂って、どんな料理を作っているか隣近所に直ぐ知れ渡ってしまう。悪事はどうなに隠しても必ず露見することの譬えである。「悪事千里を走る」のイタリア版である。

◆L'ozio è il padre delvizi.

「怠惰は悪徳の父である」漢文の「小人閑居して不善を為す」

と瓜二つの表現である。

◆ *Contro la forza la ragione non vale.*

「力に対して理性は価値がない」と直訳できる表現である。

日本の「無理が通れば道理が引つ込む」と瓜二つである。

◆ *Fidarsi è bene, non fidarsi è meglio.*

「人を信用することは良いことである。しかし信用しない方がもつと良い」

「人を見たら泥棒と思え」という日本語の方が遙かに簡潔で分かり易い。

◆ *La sfortuna non viene mai da sola.*

「不幸は決して単独では来ない」
不幸な出来事は得てして続けて起こりがちである。日本語は「弱り目に祟り目」と表現している。

◆ *Inutile piangere sul latte*

versato.

「こぼした牛乳を嘆いても無意味である」

英語の授業にも全く同じ表現の格言が登場した。日本では漢文調の「覆水盆に帰らず」が親しまれている。

◆ *Aqua passata non macina più.*
「水車小屋を通り過ぎた水はもう粉を挽かない」

水車小屋を通り過ぎた水は、再び戻って水車を回して粉を挽く機会は永遠にない。「好機逸すべからず」つまりチャンス逃すなという教訓である。

◆ *Non c'è rosa senza spina.*
「棘のないバラはなご」

美しいバラの花を摘もうと思うと、鋭い棘に刺されて痛い目に遭う。甘い蜂蜜を手に入れようと思うと、蜂に刺されて痛い目に遭うという類似の格言もある。「楽あれば苦あり」に

相当する。

◆ *Cane affamato non teme bastone.*

「飢えた犬は棒を恐れない」
腹ペコの犬の目の前に美味しい餌があり、餌の傍らに棒を持っている人が立っていると、犬は棒で殴られるのを承知で餌に飛びつく。棒で殴られる痛さよりも空腹の方が辛い。イタリア語辞典には「背に腹は代えられず」という解説が載っている。

◆ *In bocca chiusa non entrano mosche.*

「閉じた口には蠅が入らない」
口を開けると蠅が飛び込んで来て不愉快な思いをするから、閉じている方が無難である。口を開けて喋りすぎると他人の心を傷付ける恐れもある。辞書には「口は禍の元」という解説が載っている。

◆ *A parole tutti sono eroi.*

「言葉だけなら誰でも英雄」

俺が、俺が……という自慢話を聴いていると、天下の英雄のような印象を受けるが、実際は実力ゼロの無能人間の場合も多い。イタリア人は自慢話が好きな民族なのだろうか。

◆ *Ci vogliono fatti, non parole.*

「必要なのは事実であり、言葉ではない」

日本には「不言実行」という簡潔な四字熟語がある。

◆ *Il buon vino non vuole frasca.*

「良いブドウ酒に看板は要らない」
美味しいという評判が広まれば宣伝しなくても遠くから大勢の人が買いに来る。漢文の「桃李不言、下自成蹊」と同じ発想である。

◆ *Una mano lava l'altra e tutte e due lavano il viso.*

「片手がもう一方の手を洗う。両手が顔を洗う」

手を洗うには必ずもう一方の手が必要であり、両手が協力すれば顔まで洗える。相互扶助の重要性を説く格言である。

◆ *Finché c'è vita, c'è speranza.*

「命ある限り希望がある」

私の最もお気に入りの言葉である。私は人生の最後まで希望を抱き続けたいと願っている。因みに *dum, spiro, spero* というラテン語の格言がある。「呼吸をしている間は希望がある」と訳せる。イタリア語の命ある限り……と同じ発想である。呼吸の *spiro* (スピロ) と、希望の *spero* (スペロ) が一字違いで快い韻を踏んでいる。これからも呼吸をしている限りイタリア語の勉強を続けたいという夢を描いている。

生還！バンザイ突撃に参戦した軍医中尉（6）

美濃部 幸恵
協力 美濃部 欣平

バンザイ突撃 前夜

★ *バナデル洞窟の突撃前夜*

1944年7月5日 マツピ山の海軍部隊戦闘指揮所の上田猛虎司令から「最後の総攻撃敢行の用意をし、待機せよ」との命令をうけ深夜に洞窟に帰った井出軍医は、その後の洞窟の動きを以下のように簡潔に書き記す。

翌7月6日 午前一〇時ごろ早くも総攻撃の命令が下った。

『攻撃日時……明七月七日午前三時
攻撃地区……タナパク水上基地付近の米軍。』

合言葉……星に七夕

陸、海軍、その他で、約五〇人を一分隊とし、午前二時半にバナデル第二飛行場の北部に集結のこと』
7月6日 洞窟において、終日、総攻撃準備のため全員きわめて多忙だった。

工作隊は、鉄棒をすどろく研磨してヤリを制作してくばる。機銃、歩兵銃などの兵器弾薬の整備、手榴弾の使用法の確認などであった。

主計隊からは各人二日分の携帯食糧（乾パン）と、水の配給をうけた。

★地獄谷の突撃前夜

7月4日 米軍地獄谷の南、東側に侵攻。砲撃にさらされる。合同司令部にも砲弾が飛び込み高級将校にも死傷者がでる。

7月5日 米軍戦車隊谷にあらわる。
7月6日 日本軍は一門一挺の重火器もなく、地雷（戦車の重みで改造

した信管が爆発する。）を設置し火炎びんを持って肉弾攻撃をくり返し、米軍を一時退去させた。しかし「再度の米軍攻撃に日本兵は抵抗せず谷に退去し、草ぶきの小屋の中で約60人が手榴弾自決していた。」（米公刊戦史）

最後まで果敢に抵抗する日本兵に米軍は驚愕したそうです。

★7月6日 三將軍自決「サイパン

島守備兵に与える訓示」

「サイパン守備隊に与える命令」が出された。

残された最後の幕僚会議では陸海軍の間で、二つの作戦が論争になった。

☆海軍 残存日本軍は島北端バナデル地区に後退し、日本艦隊を待つて持久戦で戦おう。

☆陸軍 解体した残存兵力を結集し、最後の総攻撃決行をする。

一般邦人の犠牲者をこれ以上出さないために、彼等を北へ避難させるべく陸軍の作戦が決定されたともいう。

☆軍旗奉焼 夜になって、将兵は燃える軍旗に別れをつげ、つぎつぎ最後の突撃のため出発していった。

玉砕突撃 その時……

★井手次郎軍医の回想

7月7日 午前1時……主計より、最後の盃として日本酒がくばられた。飯盒のふたにそそいで、全員で乾杯した。

歩行不能の重傷者には枕元に手榴弾と水がおかれた。われら行く者は岡本軍医長のもと全員で敬礼し、無言のわかれをつげる。



バナデル飛行場滑走路跡(右下)

戦時には日本兵、在留邦人総出で完成を急いだ滑走路は、繁茂する植物の中に白く輝きその名を留めています。

バナデル飛行場後方はマツピ山

岩山に猛烈に撃ち込まれた艦砲の傷跡は、まるで裂けた悪魔の口のようにまがまがしい。

マツピ山の先端まで追い詰められた兵隊や邦人は約 200 メートルの崖下へと投身自殺した。スーサイドクリフと呼ばれています。

午前3時……総攻撃部隊全員が、指定されたバナデル第2飛行場の滑走路に集合した。

海軍の総攻撃指揮官は上田猛虎中佐だったと記述されています。

短い命令と、将兵たちへの感謝の言葉が終わると、第一分隊より分隊順に出発しました。

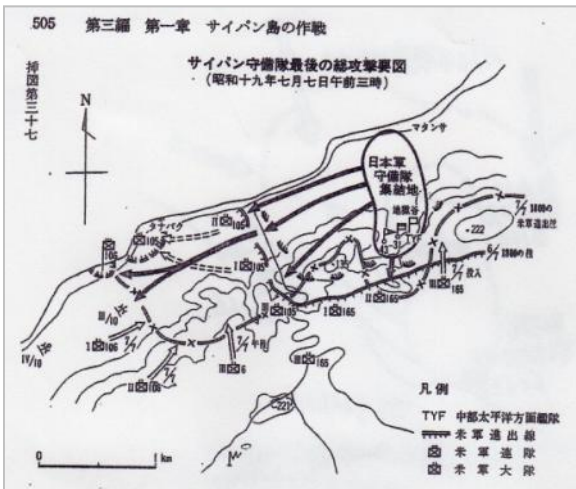
かくして……突撃行進がはじまった。

医務隊は第32分隊。攻撃部隊の後部ちかくで進撃に加わった。

残るも死、進も死。胸中だれもが手をあわせ祈りをささげた。

午前1時30分……入り口に近い者より順に洞窟をでた。

暗闇の中を4、5人ずつ静かに集合地点に進んでいく。ときおり近くに砲弾が落下しては炸裂した。



暗闇のなか数日來の戦闘で倒れたわが陸軍部隊の屍が累々。死臭漂う中ひたすらおし進む。

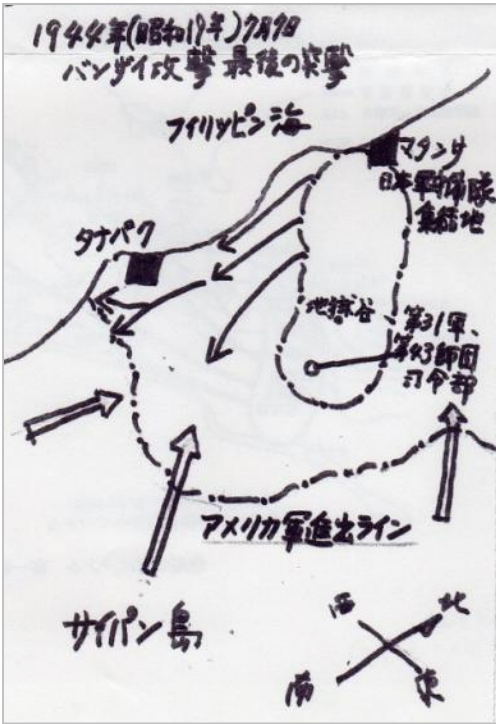
午前3時30分ごろ……バナデル水上基地約2キロ手前の敵陣地付近で、

突如としてワアーという喚声があがった。

先鋒の第一分隊の突入がはじまったのだ。

玉砕突撃 その時……

★南洋憲兵隊 加賀学伍長の回想
7月7日未明 地獄谷では鈴木卓彌



大佐を陸軍総司令官とし、それに続く将校たち、待機していた兵たちが黙々と動きだし従った。命令も号令もなかった。

谷間には歩けない負傷兵も沢山いた。玉砕突撃と知って「俺たちも連れて行ってくれ」だめならこの場で殺してくれ」との声が上がった。

………

海岸と山側からワアーワアーと喚声が起こった。

ワアーワアーという声は次第に遠ざかっていったが絶え間なくつづいた。

※バンザイ突

撃は海側、中央、山側の三方向から敵陣地へ突撃していったのです。

生き残りの兵隊約三〇〇〇名（この中には在留邦人も参戦していた。）「小銃をもつものは少なく、竹やりや鉄棒、帯剣などを木の枝の先につけて槍にしたものなどが武器で、素手のもものは腰に手榴弾を吊っているのみ」

★平櫛 孝第43師団参謀の回想

「午前三時三〇分を期し、ワアーと喚声をあげて米軍に向かって突進した」狂気のようにみえる本心からの行動である」

「己をコントロールし誰からも強いられたものではない」

猛烈な敵艦砲弾、銃砲弾のなかを折り重なる戦友の屍を乗り越えて突撃した。



前方にガラパンの岬と現在のアメリカ軍の集積船が望まれます。
「日本軍の悲壮な攻撃はどんな攻撃より激烈だった。米軍の照明弾、集中砲火にもひるまなかった。戦友の屍を乗り越え、のり越え突撃した。米軍の受けた損害も少なくはなかった。しかし……圧倒的な戦力の前に日本軍の攻撃は 1944 年7月7日午後3時についにやんだ」米公刊戦史



タナバク海岸(玉砕の海岸地)
サイパン守備隊最後の総攻撃が決行され、およそ 3000 名が玉砕した。死屍累々であった海岸地帯です。後方の岩山がマツピ山とバンザイクリフ。



築港の港

築港 戦前、戦中は日本からの船や軍艦が出入港していた。
かつての米軍LVTは荷物運搬船として利用されています。
日本委任統治時代から戦時中まで、本国からの船舶や軍艦が出入りしていた築港は現在もサイパンの主要な港です。



タナバク海岸での慰霊
最後の玉砕総攻撃 タナバク海岸

1944年7月7日日本軍最後のバンザイ突撃

合言葉は風に七夕

2014年7月7日 サイパン日本軍玉砕の日から70年目の今日

私たちは、人の気配もないタナバク海岸にまいりました。

忘れ得ぬ慰霊の日となりました。

(ヨネコバルシナスさん、ジャックさん
美濃部先生、ミノベユキエ)



… … … … …

★米軍側指揮官のホーランドスミス 中将の回想

サイパン戦のこの日を、次のように記している。

「三〇〇名以上の日本兵がどつと
なだれ込んできた。

日本軍最後の突撃であつた。

ある者は竹の先に銃剣を結び付けて武器とし、なかには何も手にしていない者もいた。口々に「バンザイ」をさけび「七生報国」を唱和していた。

日本兵の装備はあわれなものであつたが、敵を一人でも倒して玉碎しようとする激しい気魄と戦意に燃えていた。

バンザイの叫びは、米軍陣地を突破し前進してきた。このとき異様な群れが突進する日本兵の後につづい

てきた。痛々しい包帯姿で杖にすがつた傷病兵も参戦していたのである。米軍陣地を1400メートル突破し、連隊本部の位置まで殺到してきた。だがわが軍の集中砲火を浴びついに日本軍は終焉をむかえた。

この日本軍の烈々たる気魄はどのような国の軍隊にも例をみないものであつた。」

当時の敵将スミス中将の軍人魂は「敵ながらあつぱれ」と日本軍との戦いを回想されているようです。

わたくしは、スミス中将の回想で「杖にすがつた包帯姿の傷病兵まで、バンザイ突撃に参戦していた」という事実をはじめて知りまして、本当に胸が痛み、言葉を失うばかりでした。

井手次郎軍医の生還

生と死の運命

『攻撃部隊は、かなりの速度で進撃しつづあつたがやがて隊列が急に止まったと思うと先に進んだ兵士がもどってくる。前方から退いてくる者、後方から進むものとで混乱が生じたのである。やがて東の空がうす明るくなってきた。そして、どこからとなく伝わってきた命令は「今日の総攻撃はこれにておわり、明朝を期し再突入する。各自ジャングルや、岩陰にて連絡をまて」というものだった。総攻撃部隊の半数以上が突入したらしいが、突入に間に合わなかった部隊は海岸の岩かげにひそんだ。』

井出軍医、予備学生出身のI少尉と他隊の主計兵曹は生き残っていた。「この時点まで生き残っていた



電信山

バンザイ突撃後、井手軍医は電信山をめざし東海岸側に出て活路を開こうと考えましたが…………

1944 年7月1日 河村部隊の田中隊長は、残存部下と電信山トーチカまで後退してきます。しかしそこも戦闘で艦砲と火炎放射で攻撃を受け、こつぱ微塵に粉碎されていました。
約50体の兵士の無残な屍を目にするのです。(田中徳祐著 我等降伏せず)

写真は蔓性熱帯植物に蔽われて行く旧日本軍通信所の廃墟です。



破壊された内部の壁に整頓された工具類の跡がくっきりと残されていました。

しかし夜になっても再突入の連絡はなく、やむなく敵の占領地域に潜入し、東海岸方向へ進み活路を開く

「軍医長に最後の敬礼をし、別々の運命の道を歩むことになりました。」

ことは奇跡としかいいようない」と当時をふりかえり書いておられます。岡本軍医長は、50メートルほど離れた岩かげに2名の兵と無事であったが他の衛生兵の行方はわからなかった。

軍医長は「今となつては信すべき

指揮系統はなくなった。井出中尉はこれからどうするか。敵陣地に再突入するか、またもとの洞窟にもどるか考えよ」

岡本軍医長はジャングルのなかで偶然一緒になった301空の軍医長宮沢軍医少佐と決心したのか「オレ

は洞窟にもどる」といった。北の洞窟で重傷患者と運命を共にする覚悟と思われた。

若い井出軍医は261空のI少尉と話合い

「もう一度前進することにいたします。これまでいろいろありがとうござ

いました。これにてお別れいたします」



寝室であったと思われる一部屋は、鉄骨だけになったベッドと椅子が。
——最後まで任務を果たさんと通信所で戦った日本兵たちの姿が 70 年のかなたから浮かびあがって参りました。

に倒れ込んだ。夢うつつに英語の会話を聞いたと思った時、軽機を腰だめにした米兵に捕われた。

井手軍医達には、軍刀以外武器もなく、反撃する余裕も気力もなく当然その場で射殺されるものと観念したのでした。

.....

その後

日本軍捕虜収容所将校士官区域に入れられた後、米国本土の数か所の収容所で一年数か月を過ごされたのです。この間

「私たちのもつともおそれていた虜囚としての屈辱の日々を送らねばならなかった」

戦後三十五年を過ぎて井出先生が

書かれたこの結びの一言に、私は驚きました。

「生きて虜囚の辱めを受けず」の戦陣訓が軍隊に行かれた方にとつて生涯消し去ることの出来ないものであったのかと。

死を覚悟しバンザイ突撃に参戦し、さらにもう一度射殺されることを覚悟した。

しかし運命により、玉碎の島から奇しくも生き残ったことの複雑な心境と重荷は、戦争に従軍した当時者でなければうかがい知れないことなのだ。

次回エピソードに続きます。

【参考文献】

精強261空虎部隊サイパン戦記

井手次郎 光人社

サイパン肉弾戦 平櫛孝 光人社 NF 文庫

米公判戦史

ことになりましたがやがて水筒の水もつき、のどの渇きに苦しめられます。

3人共疲労困憊し体力の消耗ははげしく、軍刀を杖に歩いていても、精神状態も朦朧となり、ジャングル

医芸俳壇



静岡 岩本 漂人

シッターに半眼重きヨタカかな
蟬しぐれオオヨシキリの声混じり
田水張ればハシボソガラスが水を飲む
濁流をかすめ一羽のアマツバメ
天高しハシブトガラスの澄んだ声

東京 小南 丁字

春の海岩礁砕く磯の花
両陛下慰霊の春やペリリュー島
新樹光夫婦教授の麗しく
金沢城風光翠つつじ燃ゆ
噴煙の箱根山野の梅雨煙る

新潟 中村 雄彦

恋猫の声何処までも響きあり
朝まだき手摺冷たき散歩道
春の宵ビデオ聴きつつ眠気待つ
初場所や背中に分かる力士の名
秋さやか老いも若きも唯走る

兵庫 廣辻 逸郎

七十年この日まつ赤な夾竹桃
子走りの塾のカバンや蟬しぐれ
炎天下故郷の球児逆転打
大花火新マンションに影映す
花火終え子らの騒ぎも散ってゆく

東京 福神 規子

神さびし磴が十段法師蟬
寸胴におはす仁王や賜日和
姫塚も彦塚も秋風の中
丑寅に東雲神社城の秋
風や秋買うてもみたきとんぼ玉

東京 福富 清子

梅雨の蝶文目ぞ命宿貸さむ
茅の輪くぐる八十路見守る大鴉
母へお土産夜店より兄息切らし
生温き身過ぎ世すぎに残暑かな
青柿の小家老老籠るらし



医芸柳壇



青森 秋元光博

素晴らしい辞世の言葉「ありがとう」

世界一長寿の日本誇りましょう

問題は山積医療費高額化

肥満症飽食時代の泣き所

恵比寿顔孫の自慢をひとくさり

青森 秋元光博

死に際に親族急に倍に増え

見た目より心きれいが大事です

珍しい物に目利きのコレクション

夢言えば世界一周豪華船

近未来ロボットだらけの施設でき

東京 小南丁字

おにぎらずおにぎり風でおもてなし
欽ちゃんのボケ策大学入学す

とんと知らず人工皮膚は豚だつた

プロボクシングビック十秒一億円

高をくくり健診無視が要介護

群馬 豊泉 清

夏痩せをしない体質つらい秋

割烹着亭主もキチンで板に付き

遺言状書いてはみたが遺産なし

新聞はトップの謝罪がトップ記事

沖縄の民意が解せぬヤマトンチュ

冬季号・春季号 原稿募集のお知らせ

次号（冬季号）締め切り
平成27年11月19日（木）

次々号（春季号）締め切り
平成28年2月18日（木）

毎号、会員のみなさまのご協力、誠にありがとうございます。

二季号分の原稿を募集させていただきます。掲載季号の指定がございましたら、その旨も原稿送付時にお知らせください。何も記載がなければ原稿到着時点での一番早い季号での掲載となります。

引き続き、会員の皆様のご支援・ご協力をどうぞよろしく願ひ申し上げます。

※一部500円にて機関誌の追加購読も承っています。ご希望の方は事務局までお知らせください。

医芸歌壇



会津磐梯山

茨城

羽生 藤伍

空青く白雲浮び樹々みどり裏磐梯の三湖に写る

磐梯山緑の斜面に真白なる観音像が鮮やかに立つ

十七人の少年自刃の飯盛山、飯を盛った形に見ゆと

水無月の緑の庭に薄紅の凌霄花ひねもす揺れる

百歳の伯母の住む家訪ねれば総理表彰ではば愛想よし

真夏日

茨城

羽生 藤伍

敗戦日より70年の日甲子園野球テレビに全国湧きいる

県央のメデイカルセンターへ開業後50年間検診に通えり

真夏日に庭に降りたち水撒けば大喜びて周りを駆ける

素兎の創を癒した特効薬蒲の穂絮を初めて見たり

庭央にスプリンクラー水噴けば金魚喜び犬逃げ廻る

夏の庭

東京

横田 英夫

北国に育ちし吾には懐かしきダリア伸び出づ深き緑に

庭前にゼフィランサスの咲き出でぬ俄かに伸びて薄き黄白色

若き日の記憶の花と異なりてダリアの幹の太くたくまし

簾越しに百日紅の花房の日々増え行きて立秋となる

炎暑酷暑猛暑続きて庭前のダリアの花の減り行くは寂し

映画

東京

小松 安彦

名を知らぬ九月の花よしろたへの白き花びら風に揺れをり

バイオリン協奏曲を聴きをればあの秋からの風の吹きくる

この先はもう見られない秋の夜に完結編をみつゝ哀しむ

もみぢ葉を踏まないやうに晩秋の桜並木をゆつくり歩く

こほろぎの声の聞こえぬ秋の夜は心を映す鏡に對ふ

スパゲティ

東京

林 宏匡

老いづきて涙泳ふる術もなし今亡き妻を一人し思へば

行きつけの店にて食ふスパゲティわが眞向かひに妻は居まさず

いつ来ても愛想のよき女店員はや定年になりて辞めぬし

スパゲティ食ふる仕草をわが妻に注意されしは遠き日のこと

外出にはいつも着て行く在りし日の妻のブラウス憶ふ此の頃

アンコール掲載

『メキシコ・オリンピック』

旅行記念③

日本医家芸術クラブ 編



一九六八(昭和43)年十月十二日、第十九回メキシコオリンピックが開幕した。東京オリンピックが一九六四(昭和39)年十月に第十八回として開催したので、東京の次の夏のオ

リンピックだ。

当時の日本医家芸術クラブには『旅行部』が活動していたらしく、その旅行部がメキシコへオリンピックを見に行つたときの旅行記が発行されている。25家庭33名の方がこのオリンピック旅行に参加されている。2名の添乗員が付き添い13泊15日で、サンフランシスコ、サンアントニオ、メキシコシティ、クエルナバカ、アカプルコ、ロスアンゼルス、ホノルルと7都市を旅している。旅行された方のうち、11名の方がこの旅行記にご投稿されているので、その旅行記を順次ご紹介していきたい。尚、本文は原文のまま、掲載写真は印刷されたものをスキャンしたものなので、画質の悪さはご容赦願いたい。



【旅行日程表】

一九六八(昭和43)年10月

10日 東京発

サンフランシスコ着

東京国際空港より大型ジェット機にて出発、一路サンフランシスコへ

到着後、ホテルにて休息

午後…サンフランシスコ見学、マーケット通り、官庁街、ツインピークス、金門公園、金門橋、漁夫の波止場、チャイナタウン

11日 サンフランシスコ発

サンアントニオ着

サンアントニオ発

メキシコシティ着

サンフランシスコよりメキシコシティへ、途中サンアントニオ市見学

12日 メキシコシティ

第19回メキシコオリンピック
開会式に出席(午後一時〜五時)

13日 メキシコシティ

午前…メキシコ市見学、チャプルテペック公園、ゾカロ広場、中央政府、大寺院、国立人類学博物館等

午後…オリンピック陸上競技見学

14日 メキシコシティ

午前…ティティワカンの太陽の神殿、ピラミッド見学

午後…オリンピック重量あげ見学

15日 メキシコシティ

午前…オリンピックバレーボール見学

午後…オリンピック陸上競技見学

16日 メキシコシティ発 クエルナバカ着

メキシコシティより、クエルナバカ經由にてアカプルコへの3日間のバス旅行

17日 クエルナバカ

クエルナバカ見学、夜はメキシコ政府主催のオリンピックパーク

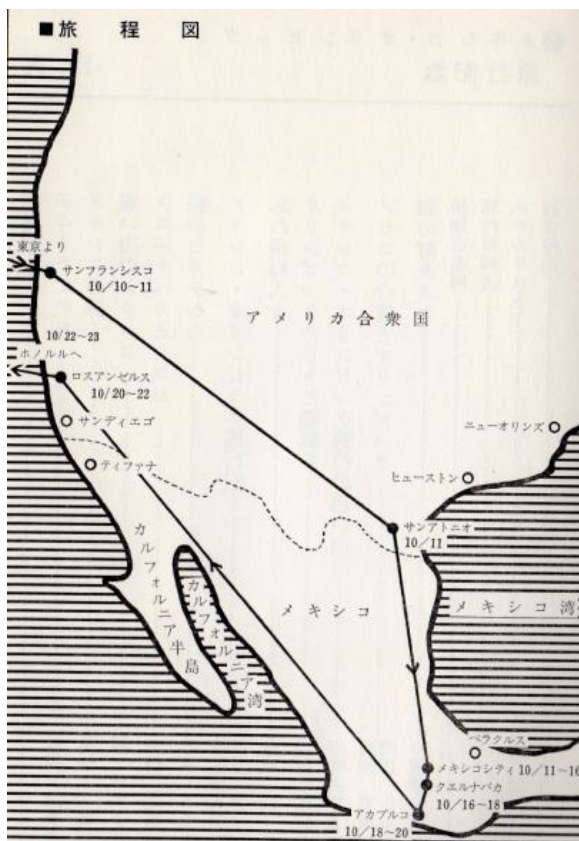
ティに出席

18日 クエルナバカ発 アカプルコ着

クエルナバカよりアカプルコへボートにてアカプルコ湾巡航、

19日 アカプルコ

ボートにてアカプルコ湾巡航、



夜はラ・ケブラダの崖上からの
ダイビングショウ見学

20日 アカプルコ発

ロスアンゼルス着

オリンピックヨットレースを見
学、午後の便にてロスアンゼ
ルスへ向かう

21日 ロスアンゼルス

ロスアンゼルス見学、ハリウッ
ド、ビーバリーヒルファーマーズ、
マーケット、チャイニーズ劇場、
オルベラ街等

22日 ロスアンゼルス発

ホノルル着

ホノルル着後、オアフ島見学、
ワイキキビーチ、ダイヤモンド
ヘッド、ハワイ大学、パンチボ
ールの丘、真珠湾、ヌアヌパ
リ等

23日 ホノルル発

パンアメリカン大型ジェット機

にて一路東京へ

24日 東京着

東京国際空港着後解散

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

メキシコ・オリンピック

旅行記

松本 喜久二

松本 喜子

四年前より計画立案されたメキシ
コオリンピック旅行会も、ついにそ
の日が来た。夏の説明会の時、飛行
機欠航の為、参加出来なかったその
轍を踏むまいとして、出発の前日に
故郷を後にした。既に合服だけでは
寒くコートを着なければならぬ
北海道から、寒いのか暑いのか皆目

見当がつかないメキシコに行くので
ある。その点が一番心配であった。

十月十日午後零時半集合だったが、
早目に羽田に行った。まだ時間が早
いせいかそれらしい人影もない。二
階食堂に上って日本最後の昼食をす
ませ戻つてくると、日医芸クラブの
斎藤さんを始め十数人の人が集まっ
ていた。外はさんさんとした秋晴の
下、絶好の飛行日和である。

日向ぼこして集合を待つ羽田

菊生

やがて一同二階の控室に勢揃いす
る。旅券その他の配付を受け注意事
項を聞き、横尾副委員長の挨拶の下、
ジュース、コーラで乾杯、いよいよ
PA機に乗組む。機に乗込む前にP
A機を背景に一同記念撮影。

見送りの家族及び関係者を後に一
四・四五分定刻出発、機はぐんぐん
と上昇し東京地方は忽ち眼下に見下

され、みるみるうちに小さくなつて行く。間もなく全く雲の上に出る。見えるものは下には雲の海、上には飽くまで青き空と真夏の如き太陽あるのみである。

雲海に機影のうつり秋晴るる

菊生

時計はまだ十六時半なのに日没開始である。十六時五〇分には既に真暗になつてしまつた。夕日が満州の夕日を思わせるようで、とてもきれいで印象的だつた。

日付線通りしといふ秋日落つ

菊生

サンフランシスコ着は現地の朝七時半頃の予定（東京の〇時半）なので、お酒の力を借りて遮二無二睡眠をとる。時には目が覚めながらも少しは眠れたようだった。窓の外も既に明るくなり、飛行機はぐんぐんと高度を下げ始めやがて米大陸が視界

に入つて来た。サンフランシスコも間近いのであろう。



筆者・シェラトンホテルにて

時差の都合で今日もまた十月十日が始まる。やがて飛行場上空にさしかかり、地上のハイウエーを蟻の如く走る自動車の群が目に入ってくる。ついに米大陸に第一歩を印した。霧の町桑港、さむざむとした桑港、第一印象はこんな感じでもとも東京と緯度が殆ど同じとは想像も出来なかつた。午前八時頃でも霧のかかつて

いるせいか夜がまだ明けきらぬという感じだった。型の如く税関の手続きを済ませ、バスにてホテルに直行する。ホテルは桑港にても由緒あるシェラトン・パレスホテルである。ブルーの大礼服のような服装をしたドアーマンの出迎えを受ける。とたんに赤毛布旅行だなあと感じた次第。朝食をとり直に貸切りバスにて市内見学に向う。

夜のまだ明けきらぬらし霧の街

シスコとは霧の濃き街坂の街

菊生

桑港は山の都市、丘の都市で市中には非常に坂の多いのが目立つ。又、ガイドの説明によると三万海の為に非常に霧が発生し易く、私の感じでは北海道の釧路に数倍すると思う位である。然し一方、その為に冬は寒くなく夏は暑くなく、合服一着で一年中を過せるという。そして大抵の

米人が桑港に住みたいと念願しているそうである。

九月、十月は最も暑いとパンフレットに書かれてあったが、朝などは寒くてコートが必要とする位だった。有名な双子丘にのぼってみる。霧の桑港は全く絵のように美しい。日本画そのものであると思った。それも束の間忽ち霧の中にかくれてしまう状態である。



岡野岳郎さんと岩本みち夫人
(シェラトン・パレス前で)

金門橋を見学に行くも霧の為に全く見えない。止むを得ずバスにて渡

つてみる。

忽ちに霧襲ひ来し双子丘

霧厚し金門橋のまだ見えず

霧の中金門橋を通り過ぐ

霧の濃き金門橋とのみしるす

霧の中つじ咲きをり一二輪

菊生

バス見学旅行中、最もうらやましかったのはハイウエーであった。合衆国ではフリーウエーというのだそうだが、通行料もとられず四―六車線の舗装路が南はメキンコから北はカナダまで何千キロもつづいているという。この道路の維持費はガソリン一立三〇円位であるが、そのうち一〇円が税金でそれによって維持されているのだという。日本のように一立五〇円のガソリンの料金から二八・七円も税金をとりたて、それで道路はさつぱりというお国とは大分異なるようである。

桑港の中に立派な日本公園があつた。嘗ての排日の巨頭が作つたもの

という。つじが咲き、或る樹は紅葉をし、ロビン其他見知らぬ小鳥が遊び、リスが人見知りもせず芝生に樹上にたわむれていたのは印象的だった。

水を打ち日本庭園桑港市

ロビン来ている秋の庭リス遊ぶ

水澄める池あり緋鯉よく泳ぎ

菊生

霧の金門橋を通り、数多くの芸術家や作家の故郷サウスリトに渡った。小高い丘の上まですき間なく美しい別荘が並び高級？ヒッピーがあちこちにギターを持って屯ろし、平和そのもののような気がした。

ヒッピーの並びシンス「日向ぼい」

水澄めるヨットハーバーサウスリト

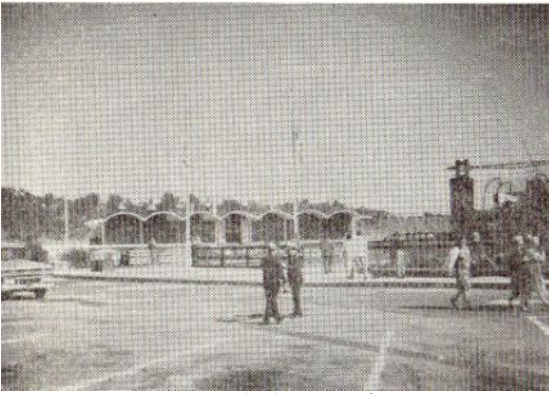
菊生

夜はチャイナタウンの上海楼にて

支那料理をとった。丁度その日は十月十日中国の双十節で、市街地を中国人による仮装行列やら、竜の踊りのパレードに遇い、宛も中国に遊ぶ錯覚をおこした位だった。

宿夜長原書の聖書めぐりみる

菊生



サウサリドの海に面した広場

翌十一日はテキサス州のサンアントニオを経由し、メキシコ領グアダハラに立ち寄り入国査証を終え再び出発、メキシコシティー着は午後八時であつた。

秋暑しテキサス州の飛行場

菊生

飛行機の上からみたメキシコシティーの夜景はすばらしかった。道路には水銀灯が並んでいる為、遥か高い所からくつきりと道路の走向がわかり、その中を車が走り、日本の夏空の星をきれいに並べたようで全く素晴らしかった。

地上の灯メキシコシティー星月夜

オパールの如き秋の灯メヒコの灯

菊生

十月十二日からはいよいよオリンピック開始。第一日は入場式である。午前九時半ホテルジュネーブ出発、途中メキシコの白バイが二台バスを

先導してくれる。沿道の市民が日の丸の旗をみて多数手を振り声をあげて歓迎してくれる。途中の公園、広場、家庭の庭に国花のダリヤが多数咲き溢れている。

乾季でふメキシコシティーダリヤ咲く

ソムブレロ冠りメキシコ人裸

菊生

十一時漸く会場につく。着くと間もなく入場式開始となる。入場式の時間が全く人によって一定しないのには驚いた。帰国後新聞で知ったが、新聞記者にさえ正確な時間が発表されていなかったというから二度びっくり。競技場で使用されたオメガの時計も泣こうというもの。入場式の各国の服装が面白く、服装の展覧会のようにもあつた。各国の間ではチエッコの人氣がすばらしかった。政治的同情からよるものであろう。

秋の日を浴び聖火今階を

聖火今着火メキシコ天高く

五輪旗のあふれ会場爽やかに

風船の五輪となりて飛び行きし

菊生

メキシコシテは海拔二三〇米もある、日中はかなり暑く半袖のポロシャツで結構だが、夜はかなり冷える。水道の水はぬるま湯の如くぬるい。窮余の一策として夜コップに水を入れ窓の外に出しておく、忽ち全くつめたい水となつて毎朝乾いたのどをうるおしてくれたものだった。

新涼のメキシコシテの宵迫る

メキシコの乾季の空の寝待月

寝苦しきメヒコの一夜寝待月

菊生

十月十三日は午前中市内見学に向かう。ガイドの説明によるとメキシコの歴史は古く、遠く紀元前に及び、

エジプト、ペルーと並ぶ世界でも屈指の考古学の宝庫であるという。

最初にソカロ広場（憲法広場）を

訪れた。ここはアステカ王朝時代に神殿のあつた所で、この広場をとりまいて十六世紀に建てられた大寺院旧スペイン植民地時代の副王の政庁などがある。この政庁の壁画は有名な画家ディエゴ・リベラの作であるという。

爽やかやソカロ広場に風ありぬ

数多菊咲き大なる石の鉢

裸体像 騎士像とメキシコの秋

菊生

メキシコシテはチャペルテペック公園、アラメダ公園等大きな公園が多い。又、コロンブスの像、独立記念の像、アステカ族最後の王クアウテモックの像とか、実に銅像が多く、又、公園には噴水の多いのが目についた。

午後は沢木、鈴木選手の一万余米決勝及び飯島選手の百米準決勝をみたが、敗退に終った。

ソムブレロ冠り物売りよく通る

大つばのメキシコ人の麦臺帽

菊生

メキシコシテというのはその昔テスココ湖の中に浮ぶ島だったそうである。十三世紀頃南下してきたアステカ族が、彼等の間にサボテンの樹の上で鶴が蛇を捕えている所があれば、そこを根拠にすると繁栄疑いなしという言い伝えがあつた。それがこのメキシコシテの地だったという。それでサボテンと鶴と蛇がメキシコ王朝の紋章となり、国旗の中央に書かれるようになったのだという。扱、このメキシコの要害に拠つたアステカ族はコルテス族を征服し、十六世紀には太平洋岸カルフォルニア州からメキシコ湾岸に至るメキシ

コ高原全域を征服しアステカ大帝國となつた。その後コロンブスが米大陸を発見し、キューバからメキシコ灣岸にメキシコに侵入して來た。

こうしてスペインとインディオの文化が合流したのである。メキシコの独立は母國スペインがナポレオンにより侵入された為、植民支配政治に混亂を來し、革命となつた。一八二一年に一応完成したが独立後、なお侵略と混亂がつづき、テキサス、カルフォルニアを失つたのだという。十月十四日メキシコシテ一の北郊五十軒の所にあるテオティワカンの太陽と月のピラミッドを見學に向う。雲一つない秋晴れの日をサボテンの林を通り抜け、インディオ部落を眺めつつ太陽と月のピラミッドのある丘につく。當時は太陽と月が宗教の中心だったとの事で、このピラミッドは紀元前のテオティワカン族の建

造したものと言われて居り、その周圍には各種神殿、城砦、地下建築などの壮大な規模の石造建築の跡が残つてゐる。太陽のピラミッドは二二四米四方の正方形で、高さ六五米もあるという。階段を数えたら二四四段もあった。そのスケールはエジプトのピラミッドに匹敵し、この建設には一万人の労働者が二〇年間ぶつ続けに働かねばならないという事である。

午後は夕方より三宅兄弟の重量挙げを見學に向う。金銅のメダルを獲得し感激のときであつた。

北斗まだ見えずメキシコ星月夜

菊生

十月十五日午前男子バレー、対ポーランド戦を見學、強敵なるも三対〇にて完勝、學生時代にかえった氣持で大いに声援する。午後沢木出場の五千米見學の予定だったが、

俄に雷雨激しくなり自由時間となる。雷きびしメキシコの空かきくもり稲妻の光るネオンのメキシコ市邦人と話の出来し爽やかにネオン冴えしメキシコの夜寒かな

菊生

十六日いよいよメキシコシテ一出發、クエルナバカに向う。米大学生二名とバス同行する事になる。二人共十九歳とか。

クエルナバカはメキシコシテ一りバスにて一時間の行程、人口約三万六千という。ここも海拔一五〇〇米もあり、ハカラランダ、ブルーガンビリア等の花が咲き乱れる保養地であり、別荘地である。

我々のホテル、ビラインターコンチネンタルに荷物を置き、コルテスの宮殿を見學に向う。この宮殿からはクエルナバカ市街地が一望に見渡され、旧スペイン風の建物が立ち並

び、往年の隆盛を物語っているようである。又宮殿の中にはディエゴ・リベラ作のアステカ王朝がスペインによつて亡ぼされた最後の場面が、沢山壁画となつて飾られている。

夜のメキシコ政府主催オリンピックパーティーは出席取止めになつたので、コンチネンタルホテルだけでパーティーを行なう。メキシコ楽団が二組も入り、テキーラを飲みなかなか賑やかだった。

メキシコの海拔二千花野ゆく

バラつつじ咲きメキシコの冬休み

赤き花椿の花の如く落つ

バラの咲く庭のメヒコの落葉がなわが背なにゴムの一葉の落ちて来し

パーティーの庭メキシコの夜の秋

テキーラを飲みメキシコの夜の秋

楽園の終りパーティー夜の秋

菊 生

十七日、相変らずの快晴に目が覚

める。今日はタスコ行の予定。庭のプールの水が昨夜迄満々とたたえてあつたのが、今朝はすっかり水が落され、中に落葉が数枚飛んでいた。

落葉踏みつつ日本人庭を行く

片陰にマンゴを売れるセヨリータ

菊 生

タスコは昔銀山として有名だった町である。然し今は民芸品の生産地として有名で、人口約一万五千の小さな町である。白壁に赤い屋根のスペイン風の家が建ち並び、街路は曲りくねり昔の面影そのままであるという。ここでは新建築は許されないと、ガイドが説明してくれた。

道路には一面に黒い銀鉱石が敷き詰められている。昔この銀にて巨万の富を得たフランス人の寄付による豪華な教会を見学する。サンタプリスカ寺院といい、坂の多いタスコの

町のどこからでも眺められ、町のシンボルであるという。

牧場のありて牛飼ふ花野かな

メキシコの野に漆黒の小鳥来し

刈る稲のあるも珍らしメヒコの野

教会の鑼鳴りメヒコ夕涼し

メキシコの冬休みてふ人泳ぐ

スコールもありメキシコの冬休み

落葉掃くメヒコ少年ホテル屋

菊 生

十八日クエルナバカ出発、待望の夢のアカプルコへ向う。メキシコシティーより四四六粒といい、又四〇一粒という。然しクエルナバカよりは三〇〇粒らしい。

布を干しインディオ部落秋日濃し

メキシコの花野の中の滝を過ぐ

雲の湧くメキシコ峠末枯れて

サボテンも熔岩もつづみて霧走る

霧の湧くサボテンの溪熔岩の溪

霧去れば再び元の花野かな
綿を摘む土人墨入列をなし

大いなる河原に秋の水少し

秋出水ありしあとある河原かな
メキシコの野に鬼灯の生るをみし
イグアナを下げ日焼してメヒコの子
シルバンシンコ湖といひメヒコ水澄める
アカプルコ近しスコール弥はげし
崖の上に土人の部落スコール来し
椰子の実の熟れたるらしき林過ぐ

菊生

澄みきつた紺碧の太平洋と、深く
入りくんだ入江に沿って、丘一面に
豪華なホテルや別荘が建ちならぶア
カプルコは、メキシコのマイアミビ
ーチと呼ばれる位である。かつて伊
達政宗が遺ローマ使節支倉六右衛門
一行が寄港したという、由緒深い港
町の情緒は全く無きものの如くであ
る。ケブラダの断崖から海への勇壮
な飛込みは予約の席がとれずつい

見られなかったのは、闘牛の見れな
かったのと共に残念な事だった。

然し南の太陽の下に常緑の椰子が
あふれるように茂るのを眺めつつ、
波静かな海に海水浴の出来たのは最
大の保養だった。特に夜、ホテルの
周りにさかんに虫の音が聞こえてい
たのは意外だった。そぞろ日本が思
い出された次第である。又メキシコ
の夜の空は、日本と異り星が比較的
はつきりしなかった。天の川もはっ
きりせず少々淋しかった。

椰子並木あるアカプルコ夏の海
アカプルコ湾に土用の浪らしく
メキシコの秋の蝶はた夏の蝶
南方の木の実夕日を受けて落つ

菊生

この夜同勢三八名ホテルコストロ
に全員揃って会食、自己紹介もまじ
えて楽しい一夜を過ごした。

十九日ボートにてアカプルコ湾巡

航する。

ガイドはやメヒコ日焼とはやされて
快晴のボートメヒコの土用浪
遊船のメヒコ音楽土用浪
投げ銭を貰ふ子海に日焼けて
虫聞くと思はざりしよメヒコの夜
星いつか消え虫時雨のみ残り
漁船の灯ついて又消え虫時雨
アカプルコ夜の散策の虫時雨
アカプルコ既に十月虫時雨
スコールに全く止みし虫時雨
スコールの止み又元の虫時雨
虫時雨フルの庭の片隅に
虫時雨月まだ出でず午前二時
木の実落つ真夜のホテルのわが庭に
長き夜のメヒコの空に銀河見ず
長き夜の芝生の中に小さき灯
火蛾も居し蚊も居しメキシコのホテル
虫鳴くやあちこちになき室になき

菊生

十月二十日アカプルコ発ロスアン

ゼルスに向い出発、いよいよ帰国の途につく。

米墨の空菊のわが誕生日

ハリウッドの市街地通り落葉とぶ
ハリウッドの楽しい一日バス小春
ブロードウェーに下車してみもし街小春
寄せ鍋をつき合い羅府の夜長人
羅府街のリトル東京街夜長
小春日の羅府日本街小買物

菊生

メキシコ旅行の思い出

松本 喜子

メキシコの野にコスモスの花咲けり
メキシコの野にコスモスとサボテンと
椰子の木の真下に赤きチューリップ
紅葉のなきメキシコの今が秋
サボテンの赤き実をつけ炎天下
貝殻を拾ひ来 秋のアカプルコ

大輪の花咲く花野アカプルコ
南国の花にまじりて咲く黄菊
黄菊咲く宮殿前のメキシコ兵
ヒッピーの居る公園の秋のリス
オーム飼ふシルパンシンコの秋の街
ロス街のヒッピー族の日向ぼこ
花積みしカヌーの売り娘秋の浜
夫と飲む椰子の实の汁アカプルコ
ベランダに自鳩の来る秋日和

機の窓に朝やけ雲の見え初めて
シスコの街の早や真下なり
朝もやのシスコの街のしづけさを
犬を連れたるニグロの子行く
日の丸を手に持ちゆけばメキシコの
人みな拍手送りくれたる
スペインの古き建物今も尚
街に残りて美しく建つ
各国の人々交う今日の日を
祝ふ真上を風船のとぶ
どの国の子供も同じそれぞれに

かわいく思ひ孫のなつかし
メキシコの空に日の丸はためきて
身のひきしまる開会式の日
スペインの王宮といふさびれども
唯壁画のみ豪華に残る
カナダよりメキシコまでもつづくてふ
フリーウェーをバスひたすらに
スペインの昔のままのタスコ街
銀の細工の店並びをり
松林すぎればつづく麦畑

メキシコ原野どこまでも行く
原色の花あちこちに乱れ咲き
メキシコ娘のスカートゆれる
崖下をギター片手に青年の
バリトンびびくクエルナバカの朝
民芸の藁人形を売り歩く
インディオの子の瞳の真黒
インディオの少年トカゲぶらさげて
バスの異人に白い歯見せ笑む
メキシコの空一杯の歓声の
静もる一瞬聖火のともる

メキシコ・オリンピックの旅 行の思い出

三浦 みゆき

昭和四十三年十月十日、かねてより計画してあれこれ準備用意して、待ちに待ったメキシコ・オリンピックの旅の朝は上天気の中に夜は明けました。

前にも台湾五日、中国二週間、世界一周へ二十二日間と何度か外国旅行しておりますが、今回も主人と共に出かけるので、子供や孫達に送られていそいそと羽田へ車を走らせました。

何時行つて見ても、羽田のロビーやゲートは送る人迎える人等と人で一杯、予定の出発する御一諸の方々の待合室での送別会のカンパイあ

り。事故のない旅行の出来ませう様にと心に念じ乍ら、予定の飛行機の人となりました。午後二時四十五分発PA八四六便の大型機がこれからサンフランシスコまでの太平洋上を共にする飛行機かとおくづく眺め、

一同の出発前の記念写真に納まりました。前の旅行の時は、毎日毎日のコースをガイドさんの説明とコンダクターの説明を細かく記入しておりましたので、夜は其の日其の日の日誌の整理にとでも役立ちましたが、今度はのんきに見て廻るつもり、ポカンとして皆ききのがした処多く（思い出会）の文集発刊のお話も

伺っておりますが、書く事のうにが手の主人も私も一切出さずに、皆様を見せて頂く事にして、全然出すつもりなく、全然日誌の整理もしないまま、のんきにしておりましたら、斉藤様よりの旅行文集原稿の請求を

受けて、青くなっている始末です。全くの下手でまずい文章で、どんな風に進み纏るか自分でも自信ないので、何処かの或る一部までだけを書くつもりですから、悪しからずお許し下さい。

PA八四六便にて、十日午後二時四十五分、無事に羽田を後に一路針路を北上してベーリング海を径てサンフランシスコへ向う私共一行三十八人の中、私共は大阪の和田先生のおとなりの席へつきました。九時間以上の長い時間で、夕ぐれの太平洋上はさざなみがゆるやいでる様な気がします。

自分達の時計ではもう夜中の十二時近くなのに、サンフランシスコへ着いて、未だ十日の朝八時過ぎに驚きました。時差が十七時間もあるとの由。すばらしい朝の飛行場で、それよりバスでホテル入り、朝食後休

息して午後から市内見物に出ました。カリフォルニア州の太平洋岸中央部にある半島上にあり、西は太平洋、北はゴールデンゲイト湾、東はシスコ湾に面しているすばらしく立派な整った町です。

ファーマーズマーケット、官庁街と坂道の多い町並を通り、金門公園の美しい立体的な花だんもすばらしく、濃霧のため向い側の見えない米ぬりの金門橋を渡り、バスを止めて一休みしました。あちこち前後して、うまく綴れないが、漁夫の波止場では（舟が昔の古い）売店になって浮いており、買物をしたり、8ミリ写真のパチパチしたり忙しい。此処は少しはていの良いヒッピー族の若い男女の二人づれが、髪を長くして手を取り合って歩いて行きます。私共年配者には、ナットクのいきかねる今の若い世代の人々の考え、アメリカ

でも日本でも大流行で全く困った現象の様に思えます。

昼は皆で日本人の経営する日本料理の食堂にて、天丼を食べて一寸ほっとしました。

夕食後は皆で街へ出て、チャイナタウン街を通り、折り良く中国の双十節とかで中国係の子供達、青年達の双十節の祝賀パレードがあり、あちら風に着かざった子供達の美しい服で面白おかしく、長いかざり物を持って、高くひくく上げたり下げたり、竜の長い長い踊り等、仲々比の行事は地元でも見られない人も多く、私共はシスコの町で双十節行事を見られたのは運が良かったとの事です。昔強い大地震があった由にて、其の後立派な坂道の多い道幅の広い、両側の建物もどっしりした落ちついたすばらしい街になったとの事です。夕食後ホテルにかえり、アメリカの

第一夜を過しました。

十一日の朝は早く、六時起床、七時十五分には荷をローカへ出して朝食。八時、バスで一〇一号の四車線にて空港へ。途中、ジャイアンの野球場が左手に良く見えました。シスコ空港も又すばらしく大きく立派それで飛行機の飛び立つ数のものすごく多いのに驚きました。次々と、ほんとうにひっきりなしに出て行くので、前に出て行き次々と出て、私共のアメリカン航空ののった待機の機の前にも、ふり返れば後にも続くのでこんなに連続で大丈夫かなあと思いました。

サンアントニオ経由、メキシコへ向うので、時差は二時間との事。朝約九時半一同出発、約三時間のサンアントニオ着でのり替えのため一休み。ヒコーキは其のままのり次いだのか別なヒコーキが忘れましたが、

夕方待望のメキシコオリンピックの地メキシコシティ着、無事着陸してほっとしました。空港にてがっちりした、目の大きい、ラウエルさんが五日間のガイドをしてくれる事をききました。

人口七百万の中南米で一番大きいすばらしい町、ホテルも大きくどっしりして落ちつきの有るホテル、ロビーで大久保氏より室割を渡され、一日のつかれを各室で休み、食堂でメキシコ第一日目の夕食が始まりました。明日のオリンピック入場券の入手がおくれてくるとの事で、大久保氏が心配して、其の方の係の処へ出かけたり、あれこれ色々御苦労様な事です。

ハムがとても大きく食べ切れず、私は血圧が高いため旅行中は豚肉は一切食べませんでした、とに角何んでも大きく量の多いのに困りました。

た。デザートは果物類はおいしく、とてもたのしかった。スープは油のきらきらういたのが余り好きでないが、仕方がないので頂きました。

明日はいよいよ待望の十九回メキシコオリンピック入場式。夕食後売店をのぞいて室に入り、荷物整理して風呂に入り休みましたが、室がムンムンあつくて、ねむりにくかった事をおぼえています。

十二日の朝は、はれの天気。一時からの入場式に間に合う様、各国から集りこみ合うので、九時頃一同バス停まで少し歩き、一同日の丸の小旗をふり乍ら揃って出かけました。外地で見る日の丸は神々しい感じです。

仲々サービスが良く、競技場行のジェンカンバスあり、人ごみの中を一同都合良く乗れました。各国の人々の波、色とりどりのお

国の姿で各地から集つてるので、とてもにぎやかで、すばらしい町並は、ワシの羽根の広げた形がハトの様にも見えるかざりつけ、競技場を示す其の形、至れりつくせりの町かざりは、東京でも見られなかったものでほんとうに美しい眺めです。

競技場は割と遠く時間かかり、だんだん会場に近づくにつれ時々車はストップ。自家用車、バス、人々でおくれ勝ちとなり、ノロノロ運転です。入口に近く、動きがとれず一同下車して歩きます。右左前後男女共に、人、人、人の波。十一時の入場式近く皆急ぐ、人、人、人で、全く歩きにくく、かんかんでの暑さで汗は出るし、日の丸の旗を高く上げて持ち歩きます。いよいよ会場近く、各自の入場口番号により一同一緒に入りました。すばらしく立派な競技場です。メキシコの子供達が、

あちこち一杯タムロしてるのが目につきます。時間ぎりぎりまで各自の席についてすぐ、入場式が始まります。上はかんかんであり、あついあつい。人は一杯、赤黄みどり、色とりどりの外人の姿が目にしみる様です。皆で、あついでボーシを買ってかぶり、8ミリの用意、写真の用意をして待っています。

いよいよ十一時、間もなく選手団の入場式が始まりました。それぞれお国柄のスタイルの服装での入場式、全く目をみはるばかり。私共の席は一番下の前から二番目で、ずっとひくいので、もつと高い方が良かった様です。電光板の真下、西日に向つての席で暑い事メッポウなり。大きい五輪のゴム輪が五コ、アドブルーの様にうき上りました。

ボーイスカウト少年達の手で、ハトの大群のかごがあげられ、何千何

万のハトが一せいに飛び出して、大きく輪をえがいてとび交う姿は正に一幅の絵の様でした。其の前にあみの中から、何百万のゴム風せんも飛び出し、色とりどりの美しさは何にたとえ様もない位可愛らしく、赤黄みどりとそれぞれ空へ向つて舞い上るゴム風せんは、ほんとうに美しい眺めでした。

いよいよ入場行進が始まり、次から次へと私共の目の前を若い選手達、ニコニコし乍ら手を上げて通り過ぎます。8ミリをどんどん写し、写真機を不なれな手つきで、主人と私も他の人に負けじとシャッターを切る。各国の応援の声、声、一だんとかん高い声もきこえる。中頃に漸く日本の白・赤のブレザー姿の日本選手に一同どつと声を大きくして、日の丸を高くふり上げます。各スタンドから遠く近く日の丸の旗が見えま

す。随分相当の日本人も来ているようにでバンザイ・バンザイの声がかき消えます。

地元メキシコの選手に、拍手が高くなります。

世界各国選手が一堂に集る比のオリンピック行事は、ほんとうにすばらしい事です。良くこんなにすばらしく設備を整えたと思います。会場の外の雖画もメキシコらしく、立派ですばらしい。食べ物売り、ボーシ売りも多く、私共も買ってかぶりしました。大型の高いソンブレロを買った先生も居ます。真赤な服着て若い少年のコカコーラ売りの、背中になタングを背負つて、パイプからコップへ出して売つて少年の姿が、とても珍らしく思えました。

整列後、式が始まり、ブランディジ会長の大会宣言、東京からメキシコへの次期オリンピックのバトンタ

ツチ、皆様テレビで見た様な次第の式典はくり広げられ、いよいよクライマックスになり、大変なもり上りです。女子選手の聖火ランナーの到着する頃は、並んでた選手達の列も

どっとみだれ、人のかげになって走る彼女の姿もかき消されがちで、カイ段をかけ上り、聖火台に着いてタイマツの火のついた台を見て一同バンザイ・バンザイとさげびます。さ

ーっと火がついてもえ出し、これから二週間の開催中無事消える事なくと念じ乍ら、美しい南国の空を見上げました。中々うまい表現が出来ず残念ですが、世界の人が一つの火を見つめてそれぞれの感激にひたつた事でしよう。

式の前か後か忘れましたが、大砲の礼砲もなり出し、白い煙をはいてなり出す様も又何とも言いかれぬ荘ゴンな感じでした。出席国の国旗が

ヘンボンとひるがえり、日の丸も西の空のスタンドの私共の西正面にひるがえり、何んとも感無量の思いでした。

見渡す限り満席の式場風景、各自がパチパチ、世界の人が一つに集う同じ競技を見るたのしき、喜ばしき、人種をこえてほんとうに喜ばしいきわみです。

式後、選手団が真中より二つに分れ、日本団は帰りは私共の席の前を通らず西側に廻り退場したので、日本団を見る事出来ず残念でした。アベベ選手と、チャスラフスカさん達は拍手のマトでした。式終了後、三三、五五退場する客達も仲々席を立ちがたく、感激の入場式は終り、皆名残りおしそうに後をふりかえり乍ら退場して場外に出る。外へ出れば、外も人で一杯。皆集まって日の丸を持つて立つてると、旗を欲しがって

子供達が集まります。大人子供達が色々の売物、メダルを持つて集まり、少しガマ口でもあけ様ものなら、ワッとするので困りました。

尚帰りのバスを見つけてホテル迄かえるのに一苦労、外は人々の波、皆各自の宿へかえる人でゴッタかえし、車のうばい合い。夕ぐれのうすぐらさからとつぷり日はくれ、仲々人ごみの中で大変一同心細くなるも大久保氏の指図通りついて歩き、二時間近くもたました後、漸く途中迄の選手村行の車に一同うまくのりました。途中選手村で下され、又別車にのりかえて漸くホテルにもどつたのが七、八時過ぎでした。やれやれ目ざす入場式見学も無事終り、ホットしました。

※(原文まま)

歌集『旅塵』

林 宏匡 著

林 宏匡先生の『医眩』に続く第十一
歌集



平成十四年から平成十九年までの主
に当クラブ機関誌『医家芸術』に掲
載した作品を中心に纏めた歌集



（前略）編集前の原稿に改めて目
を通してみると、五十年以上歌を続
けていながら未熟と思われる様な作
品が多く目についたが、あおれそれ
の作品を成した時の感性を大切にす
る意味で出来る限りそのまま収載す
ることにした。

歳を重ねる程に幼少期の思い出が
鮮明化して来るのは人間として当然
のことであるが、成育地の樺太での
哀切な記憶は六十歳代半ばを過ぎて
益々強まり、作歌力とは裏腹に作歌
意欲の高まりを覚えて詠み溜めた作
品を本歌集の前半に収載した。（中略）

尚、本歌集名『旅塵』は本集には旅
行詠を多く収載したことに加えて、
人生は屢々旅に譬えられるが、小生
の人生の旅路に降り注ぐ世俗の塵の
様な歌心によって生まれた詠草を収

載した歌集という意味と湖笛会章創
者故林霞舟の歌文集『浮塵』の「塵」
をいただいて集名とすることにした。

（後略）

【序に替えて】より

（湖笛会・二六、五〇〇円）

※表示価格は税抜きです。

会員の著作を紹介する欄です。近
著を事務局まで送ってください。

『九十五歳記念』

飯田収絵画展』が開催

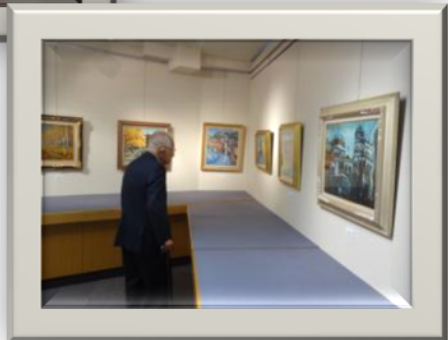
白矢 勝二

平成二十七年七月二十三日（木）
より七日間、京王百貨店新宿店六階
にある京王ギャラリーにて、当クラ
ブ美術部員の飯田 収先生が個展を
開催された。

毎年行われている医家芸術美術展
での出展作品をはじめ、飯田先生の
迫力ある絵画が入れ替わり数十点展
示され、訪れるものを魅了した。

当クラブからも数人が訪れ、その
素晴らしい絵を前に飯田先生の素敵
なお話を聞き、贅沢な時間を過ごさ
せていただいた。御歳九十五歳と同
うが、なんともお元気で同じ絵画を
愛する者として敬仰する。

この個展を開催するにあたり、記
念の画集を発行された。その中で、
当クラブ委員長の太田 怜氏、副委員
長の初芝澄雄氏と、僭越ながら私も
お祝いのお言葉を送らせていただい
たので、ここに掲載させていただきます、
改めて個展の成功と、飯田先生の
益々のご活躍を期待いたします。



【画集表紙】



【画集掲載祝辞】

画のひとすじ

日本医家芸術クラブ委員長

太田 怜

飯田収先生がこの度九十五歳になられました。それだけでも十分におめでたいことですがその記念に新宿の京王百貨店で個展を催されることになりました。重ね重ねおめでたで、

何とお慶び申し上げてよいのやら。

わが日本医家芸術クラブには各種分科クラブがありますが、絵画部はその中でも質量ともに出色のクラブです。先生はそのクラブの中心として長年続けて作品を出品されますが、それよりも当クラブ全体の誇りであり喜びでもあつて、先生に対して厚く御礼を申し上げたい所存です。

先生には今後ますます御壮健で画業に専念され、いつまでも変わらずに若々しい作品群をわれわれに御披露下さることを祈念するとともに、今回の盛会を心から慶賀する次第です。

九十五歳を祝う

日本医家芸術クラブ副委員長

初芝 澄雄

このたび、飯田収先生の九十五歳

を祝う記念絵画展を、京王百貨店新宿店で開催されますことにお慶び申し上げます。

先生は、日本医家美術展に長年にわたり作品を出品されていますが、当クラブのベテランの先生が、飯田先生の絵は「華麗なる画風」と評されたことを思い出し、改めて「飯田収画集」を繙いてみて、その批評に納得したことを覚えています。

少し前になりますが、医家美術展で先生の出品作「甲斐駒ヶ岳」の作品を鑑賞した折、日本で二番目に高い山、北岳に並んで聳える甲斐駒ヶ岳の現風景の雄姿を想い、絵画の見事なまでの描写力に感動した記憶があります。

今回の記念展で、会場のギャラリーに飾られる先生の作品の数々を拝見できるのが楽しみです。

長寿の祝いごとの卒寿から白寿までは少し間があつて、その中間の九

十五歳を祝賀とする記念行事の催しは、実に素晴らしい。

先生にはますますご壮健にて絵画作品を描きつづけて頂きたく思っています。記念展誠におめでとうございます。

京王百貨店新宿店の個展開催をお祝いして

日本医家芸術クラブ美術部部长

白矢 勝一

日本医家芸術クラブの美術部に30年以上前から毎年出品されている飯田先生は、銀座の美術展では際立った存在である。

先生の作品は鮮やかな原色に近い色も目に優しく美しく映える。そしてまた躍動感やリズムがあり、とても楽しい絵だ。風景には、山や道・林・湖等がある。空や湖面のブルー

がとても美しく、それに対する山や木が生き生きと見えるのは、先生の長年の絵画に対する真摯な姿勢が表れていると思われる。特にブルーに対して橙色や緑の使い方が見事である。

美しい物、例えば花を描くというのは、難しいというのが私の持論である。ところが先生はいろんな花をイキイキと描かれている。どの花も室内を明るく楽しくするようだ。花を花として描かれているが、実はその背景が問題なのだ。主体としての花をいかにするための背景の描き方が誠に素晴らしい。

絵はまず構図が大切であるが見事なまでにバランスよく、いずれの作品も心地よくまとまっていると思う。今回、御自身の個展は三回目ということであるが、京王百貨店新宿店での個展は絵を描く者なら誰しも憧れ一度は開催してみたい会場である。

九十五歳をという節目の年に開催されるのはまことにおめでたいことであり、日本医家芸術クラブ美術部としても誇らしいことである。これからも数多く飯田先生独自の作品を描いて頂けることを期待してお祝いの言葉とさせていただきます。おめでとうございます。



クラブ通信



事務局冬休み

H27. 12. 26～

H28. 1. 6

となります

年賀広告の募集

次号・冬季号は、早いもので平成二十八年の新年号となります。

恒例の医師会会長からの年頭所感や年賀広告なども従来通り掲載予定です。そこで、今年も賀詞交換を兼ねた「年賀広告」を募集したいと思っています。

例年通り一マスに三行が基本で一口です。左右の行は、お好きな言葉で文字数二十五文字まで。中央の行は所属部署とお名前を少し大きな文字で記載いたします。

文字数のオーバー、または行数の追加などは、二口扱いとし、二マス使用して掲載いたします。

※パターンは色々ございます。例として前回の『医家芸術 冬季号』（通巻六二二号）をご覧ください。

年賀広告・一マスを一口とする。

◆一口：千円

◆応募方法…機関誌『医家芸術 秋季号』に同封されている別紙申込用紙にて、事務局あてにFAXまたは郵送にてお申し込みください。また、メールでの応募も可。文字数に気をつけてください。

◆支払方法…新年号『医家芸術 冬季号』発送時、事務局より振込用紙を郵送いたしますので、お近くの郵便局にてお振り込みをお願いいたします。

※詳しくは、秋季号同封の別紙申込用紙の記載事項をご確認ください。

多くの皆様のご協力、よろしくお願いいたします。



透視像



太田 怜

火花

又吉某の火花、単行本で二百万以上、全文掲載の文春九月号が百万以上売れたのだから、書籍界では近來の大ブームである。雑誌文春などこれまで本屋でいつまでも山積みになれていたのだが、今回は店頭から忽ち消失、雑誌なのに態々注文しなければ手に入らない始末となった。思うに人気お笑い芸人が小説を書いたということ、普段本を読まない人々がこの本を買ったのであろうが、実はその逆で、かくれた文学青年がたまたま漫才を生業としていたことのあらわれである。私は彼の生業を知らない。だがブームに乗せられて

単行本は購読した。しんどいだけで面白くなかった。内容があまり観念的だったからである。芥川賞にノミネートされたとき、しかしもありなんとは思った。現実に芥川賞を受賞した後、その選評とともに原文を再読してみた。今度は笑いの原点をしつこく追及するその若々しい情熱と、生硬ではあるが一種瑞々しい叙述にある程度の好感も持った。しかし観念的すぎるその内容にはついて行けなかった。

そもそも芥川賞とは何なんだろう。もともと直木賞は大衆小説、芥川賞は文学小説の登龍門として作られたものである。しかし大衆小説なるものは今日消滅した。いわゆる劇画がそれにとつて代わったからである。したがって今日の直木賞受賞作品は昔なら優に芥川賞の対象になったであろう。だから今日の芥川賞は直木賞作品よりさらに文学的であらねば

ならない。それを純文学というならその内容に物語性がない。読んでいてワクワクするところがないのである。その結果、今日の芥川賞の作品はどれも読むのに苦労する。火花とて例外ではない。それでも毎回苦しみながら芥川賞作品を読むような被虐的な読者が他にも居るのであろうか。

編集後記



早いものであと2ヶ月と少しで今年も終わりです。『医家芸術』はこの秋季号発行の後、年内に文芸特集号を発行して、来年早々には新年号の冬季号が発行する予定です。恒例の年賀広告も掲載予定ですので、会員の皆様のご応募お待ちしております。よろしくお願いいたします。(ES)